マルコの福音書

語り直し、
解き明かし、
今日のために。

GOOD NEWS

マルコの福音書

語り直し、解き明かし、今日のために。

Hans-Jörg Ronsdorf

第2版、2020年4月
© Kirche für Alle e.V. – 無断転載を禁じます。
ドイツ語版のISBN 978-3-9820715-1-0
Kirche für Alle e.V.
Hans-Jörg Ronsdorf
Albis 6 1/2
87477 Sulzberg
hj-ronsdorf@t-online.de
www.hans-joerg-ronsdorf.de
表紙デザイン：トビアス・シュトリッカー（Tobias Stricker）
kata Markon
見てください、イエスはなんと麗しい方でしょう、

すべての美しさにまさる方！

はじめにいくつかのこと

マルコの福音書は、かなり風変わりな書です。毛深い、バプテスマを授ける預言者ヨハネで始まり、残酷な十字架刑と、イエスの驚くべき復活で終わります。マルコが語るのは、心を騒がせる、いや、心を揺さぶる物語です。悪霊に満ちた場所、爆発寸前の対立、人々が癒やされる驚くべき奇跡、飢えた人々のための不思議な食べ物の増加、そして自然の力を支配するイエスの力があります。

マルコの福音書でイエスに出会うことは、少し冒険小説に似ています——展開が速く、奥深く、白黒くっきりした場面にあふれていて、読む人は息をのみ、たくさんの問いを抱えたまま取り残されます。**この人はいったい何者なのか**。それに対して、マルコは正しい答えを示します。

あなたが手にしているこの本は、マルコの福音書を解き明かしながら言い換えたものです。この言い換えた文章と並べて、ほかの翻訳も手元に置いてください。できれば、かなり直訳に近い翻訳がよいでしょう。たとえば、エルバーフェルト訳（Elberfelder）、ルター訳、共同訳（Einheitsübersetzung）〔ドイツ語聖書翻訳〕などです。

マルコの福音書は、四つの福音書の一つです。それらは、イエスの生涯をまるごと伝える記録です。マルコの福音書はいちばん短い福音書です。けれども、おそらくいちばん古い福音書です。心をつかむ、生き生きとした記録です。休むことなく話が進みます。ほとんど息つく暇もありません。ヨルダン川でのイエスのバプテスマから、エルサレムの十字架での最期まで。およそ3年の期間です。

この福音書は子どもにも理解できます。澄んだ水をたたえた井戸のようです。けれども、深い井戸です。見た目よりも深いのです。一見しただけでは気づかない、隠れた宝が用意されています。この言い換えは、そうした霊的な豊かさにたどり着く助けになりたいと願っています。

すぐに1章からマルコの記録に入りたい方は、次の序論を飛ばしてもかまいませんし、あとで読んでもかまいません。

福音書の著者

マルコの福音書は、長いあいだマタイの福音書の要約にすぎないと考えられていました。ほかの福音書ほど注目されていませんでした。ところが、逆にほかの福音書記者たちのほうがマルコをすでに知っていて、その記録を用いていたことがわかったのです。この福音書の**著者**は、本文の中で名乗っていません。イエスの二人の弟子、つまり目撃者が、マタイの福音書とヨハネの福音書を書きました。では、十二使徒の代弁者だったペテロによる記録があったとしたら、どうでしょうか。もしかすると、彼は書くことが好きではなかったのかもしれません。彼は漁師でした。彼はイエスの生涯を、御国の福音を、宣べ伝え、教えました。そのとき、後に彼の同労者となり、信頼された人となったヨハネ・マルコが、よく耳を傾けていました。そして書き留めたのです。ペテロとパウロの同労者であるこの人が、一般にこの福音書の著者と認められています。だからこれは**マルコの福音書**と呼ばれるのです。その大部分はペテロの視点から書かれています。目撃者であり、すぐ近くにいた人の視点です。ほとんどの使徒たちよりも近くにいました。ペテロと一緒にイエスのいちばん内側の輪をつくっていたヨハネとヤコブは別ですが。こうして、イエスのこの生涯の記録は、マルコとペテロの結びつきによって権威を得ているのです。

この福音書は、ペテロが覚えていたことと、彼が説教したこととから成り立っています。いわば説教の素材であり、**神の物語**、つまり**イエスの働き、その死と復活**を語るためのものです。だからマルコは自分の記録を「福音」と呼ぶのです。そこには説教された福音、**宣べ伝えられた福音**が含まれているからです。彼は、救いについての神の良い知らせを自分の福音書によってさらに運んでいく、宣べ伝える者として書いています。

マルコは、出来事の正確な歴史的順序にはあまりこだわっていません。これは単なる歴史の記録ではないのです。そうです、彼の福音書はメッセージなのです！ 彼は自分の目的に合わせて、それをこのように編んだのです。

福音書記者にとって、出来事の正確な順序はいちばん大切なことではありません。また彼は、メッセージを神学的に細かく展開してもいません。それは後にほかの人たちがすることになりました。彼はイエスの誕生の描写を省き、すぐにイエスの公の登場に入ります。まるで、御国の福音をはっきりと、説得力をもって、挑むように示し始めるのが待ちきれないかのようです。

マルコがいつ書いたのかは、正確にはわかりません。ペテロの殉教の前だと考える人もいれば、後だと考える人もいます。紀元60年から70年までのあいだが考えられています。エルサレム崩壊の前か後かも、専門家のあいだで議論されています。とはいえ、皇帝ネロ（Nero）の時代、ローマの大火とそれに続くキリスト者迫害の後に年代を置くことに、何の妨げもありません。

彼はおそらく**ローマ**のキリスト者たちのために書いています。ローマの大火は――人々の噂では――皇帝ネロ自身が放ったものでした。彼は疑いをキリスト者たちに向けました。彼らをスケープゴートとして悪用したのです。こうして「永遠の都」で、キリスト者に対するもっとも残忍な迫害が起こりました。生きた松明にされ、猛獣に投げ与えられ、迫害は彼らを最も過酷な形で襲いました。マルコは自分の福音書の大きな部分を、受難の物語、つまりイエスの受難に割いています。彼は、イエスが受けた試練と抵抗について書いています。彼にとって特に大切だったのは、迫害と苦しみの中にあるキリスト者たちを励ますことであって、単にイエスの生涯と受難の歴史的な記録を残すことではなかった、と十分に考えられます。

マルコにとってイエスとはだれか

マルコは自分の福音書の中で、イエス・キリストをどのような方として描いているでしょうか。彼はイエスを**神の子**と呼びます。御父に愛された御子です。すでに冒頭から、神の子としてこの方がまさに神であることが明らかになります。御子として、この方はメシア、キリスト、神に油注がれた方です。この方は**人の子**という称号を持っています。それはダニエル書7章13節の響きです。そこでこの方は、永遠なる方を表す呼び名である「年を経た方」と親しい関係にあります。つまり、ナザレの大工の息子である、ただの人間ではありません。この際立った、比類のない**栄誉の称号**を持つ方なのです。この方は**ダビデの子**であり、神の永遠の王国の王座に着く権利を持っています。

そして何よりも、この方は**しもべ**です。マルコが直接そう呼んでいるわけではありませんが。けれども**この方は仕えるために来られた**のです。そして多くの人のために、ご自分に信頼するすべての人のために、自分のいのちを贖いの代価として与えるために来られました。

イエスの使命

マルコが書いたとき、すべてはとうに歴史になっていました。過去のことです。後から振り返って彼には明白だったことも、実際の出来事の中にいた弟子たちや人々、そしてイエスの敵たちにとっては、そうではありませんでした。彼らには、イエスの使命の大部分が隠されていました。十字架までは。そのとき、この方がだれであるかを深く心を打たれて口にしたのは、ユダヤ人ではなく、ローマの百人隊長でした。**この方はまことに神の子であった**！まるでマルコは、人々の目から見たイエスの正体をめぐる緊張を、最後まで引き延ばしたかのようです。

イエスの使命は、**神の支配の到来を告げ知らせること**、そしてそれについての良い知らせを宣べ伝えることでした。このメッセージに、人はどう応えるべきでしょうか。信仰と、考えを改めること、つまり悔い改めによってです。

この方を通して、**神の支配のしるし**が起こります。この方は権威をもって教え、悪霊を追い出し、病人を癒やし、赦しをもたらし、ツァラアトに冒された人を癒やし、死人をよみがえらせました。これらすべてが御国の福音に属しています。サタンとその国が攻撃されます。そして打ち負かされます。霊的な戦いです。武力によらない戦いです。けれども、劇的であることに変わりはありません。ただし、神の国はゆっくりと成長します。期待されていたように、一気に来るのではないのです。ユダヤ人たちは根本的な転換、つまりローマ人からの解放を期待していました。けれどもイエスは、まず人々の心が変えられなければならないことを明らかにすることから始められます。

マルコにとって、神の支配はイエスによって、そしてイエスに従う人たちの中で始まっています。けれども、この支配が完全に到来して地を満たすのは――今日から見ても――将来のことです。人の子が天から再び来られるときです。

まことの神の支配は、十字架を通ってのみ来ます。苦しみを通って栄光へと至るのです。十字架は神の勝利です。敗北ではありません。神の基準は、この世の基準とは違います。当時の時代とも、今日の時代とも違います。神の王国と神の支配の原則、法則、目印は、愛、奉仕、隣人のために自分をささげること、謙遜、そして平和です。暴力と服従の強制ではありません。永遠の王国の未来のいのちを、今すでに受け取り、生きること、それがマルコの良い知らせです。

旧約聖書の響き

マルコにとって――ということはペテロにとっても――ヘブライ語聖書、つまり旧約聖書は大きな役割を果たしています。けれども彼は、マタイやルカのように旧約聖書から引用はしません。示唆があり、**旧約聖書の響き**がたくさんあるのです。それがいつも表面に見えているとは限りませんが。ほのめかしや小さな示唆が、数多くあります。

次のような問いを手がかりにすると、マルコの記録を貫く赤い糸が見えてきます。**マルコはイスラエルの歴史をどのように新しく書き直しているのか**。それは、メシアであるイエスを通して、イスラエルに新しい機会、新しい始まり、いや、新しい出エジプトが与えられるはずだ、ということです。神がご自分の民を置きたいと願っておられる所、つまり神の王国へ、霊的にたどり着くためです。**まことのイスラエルであるイエスの生涯の中に、イスラエルの古い歴史がどのように再び見いだされるのか**。複雑に聞こえますが、イエスはイスラエルとご自分をあまりにも一つにされたので、この民の歩んだ道をもう一度歩み、それによってイスラエルを本来の使命へと解き放とうとされるのです。**マルコは、世界における教会の役割を描くために、旧約聖書をどのように用いているのか**。マルコ自身、イエスを通して生まれた教会の一部です。教会もまた、古い聖書から学びます。教会にとって、最初は一つの聖書しかなく、それが旧約聖書だったのです。

私はこの言い換えにおいて、マルコを補うためにほかの福音書を引用することはしません。私たちは彼のメッセージを理解したいのです。**福音書の対観表**というものがあります。そこでは、出来事をできるだけ完全に描き出すために、すべての福音書の本文が並べて置かれています。それは別の読み方です。とても興味深いものですが、ここでの目的ではありません。

ヨハネ・マルコの主な関心

この序論の締めくくりに、マルコが心にかけている**主な関心の小さな一覧**を示します。

イエスのまことの正体。それは、イエスの地上の生涯のあいだ、ほとんどすべての人にまだ隠されたままです。それが変わるのは、イエスの昇天の後です。御国の福音と、天に昇って王座に着かれたキリストが、使徒たちと弟子たちによって宣べ伝えられるときです。この完成した視点から、私たちはイエスの生涯を見ることができます。いわば、心の目を照らされた状態で。私たちはその秘密を知っているのです！

イエスの受難、その苦しみの物語は、イエスがまことにどなたであるかを示しています。そして、それと直接に結びついて、迫害、苦しみ、殉教が、まことの**弟子としての歩み**の目印となります。

神の王国の本質と到来、そして人の子が再び来られることについての問い。

イスラエルの北の地方である**ガリラヤ**への特別な関心、そしてイエスがそこへもご自分が遣わされていることを知っておられた、近くの諸国の民の地方への関心。

福音と、それが本当に意味しているもの。

さまざまな**人々のグループ**についての描写。ユダヤ人の指導者たち、イエスのまことの家族、そして特にイエスの弟子たち、十二人についての描写です。

マルコのメッセージを聞く人、この福音書を読む人はだれでも、一人ひとりがイエスの前に立つのです！ **この方はすべての人に問われます。「あなたにとって、わたしはだれか。あなたはわたしに信頼するか。わたしについて来るか。」**

今、今日こそが救いの日です。明日ではありません。いつかでもありません。マルコがイエスをこのように紹介するのは、私たちがこの方に忠実であ

り、その言葉を守り、行うためです。そうです、私たちがこの方の弟子となるためです。

まことの皇帝はだれか

本文に入る前に、もう一つ短い補足をします。それは、これまでイエスについて記したことすべてを受け止め、著者マルコの時代の政治的な緊張の中に置くものです。イエスは神の子、父なる神に愛された方です。どの皇帝も、本当の意味でこの主張をすることはできません。それでも彼らはそうしました。最初のローマ皇帝アウグストゥス（Augustus）は「Divi Filius」、つまり「神となった者の子」と呼ばれました。ローマ帝国の住民にとって、皇帝は平和、「パクス・ロマーナ」をもたらすメシア的な人物でした。けれども、油注がれた方、キリストは、イエスただお一人です。約束された平和の君です。ウェスパシアヌス（Vespasian）には二つの奇跡が帰されました。一人の盲人の癒やしと、萎えた手の癒やしです。人々はそこから、天が彼を認めていると結論づけました。けれども、数えきれない奇跡を行い、その上に天が開かれるのはイエスなのです。この福音書を受け取ったと思われるローマのキリスト者たちは、ローマ帝国によって、獣のような皇帝ネロによって苦しめられている彼らの状況の中で、彼らの主であり救い主であるキリストのほうが偉大であり、彼らの苦しみの中で先立って歩まれたことを知るべきでした。滅びたのではなく、復活における究極の勝利へと上って行かれたのです。迫害、苦しみの重圧、恐れは、キリスト者を限界にまで追い込みます。それは失敗や裏切り、否認にもつながります。けれどもキリストのうちには、赦しと回復、死に打ち勝ついのち、そして神に逆らう力に対する神の勝利のメッセージがあります。マルコがこれらすべてのテーマに触れるのは、意図があってのことです。これは、ローマのキリスト者たちだけに向けられたメッセージではなく、今日まで、かつてないほどに生きているメッセージです。

1章

こうして**神の勝利についての良い知らせ**が始まります。イエス・キリストの福音です。神に油注がれた方、メシアの福音です！ 神の子の福音です。すでに預言者マラキとイザヤが、ずっと前から、ヤハウェである主に先立って来るはずの先触れのことを告げていました。主の到来を告げ知らせ、その備えをする者です。「見よ、わたしは、あなたの道を備えるわたしの使いを、あなたの前に遣わす。主の道を、ヤハウェの道を備えよ。主がふさわしく迎えられるように、その道をまっすぐにせよ！」 神は、回復させるために、さばきと恵みのうちに来られます。マラキ書3章とイザヤ書40章が告げているとおりです。モーセの第二の書、出エジプト記23章20節の言葉も、この引用の中に響いています。「見よ。わたしは、あなたを約束の場所に導くために、使いをあなたの前に遣わす。」 それは、約束の地への新しい入場を告げる恵みの声です。神ご自身による、新しい出エジプトと新しい土地の取得です。あのときのように、今、神はイエスという人格と力のうちに来られます。**神は、イスラエルを救うために進軍しておられるのです。** 預言者たちが沈黙し、いや、神がもはや語られなかった400年の後、今、預言者ヨハネを通して、神の目覚めの呼び声が響きました。絶望している民に向けてです。抑圧され、預言がいつ成就するのか、そもそも成就するのかと不安になっている民です。けれども、すべては期待とは違う形で起こりました。**メシアが求められたのは王座ではなく、まず清い心と、生き方の根本的な変化でした。この方は人々の心の中で治めようとされたのです。**

先触れ——バプテスマのヨハネ

先触れであるバプテスマのヨハネは、エルサレムではなく、ユダヤの荒野に現れました。彼は、ユダヤ人たちがバプテスマを受け、生き方を根本から変えて神に服従すべきだと説きました。そうして罪の赦しを受けるためです。ユダヤとその首都エルサレムから、人々が彼のもとへ出て来ました。ふだんバプテスマを受けるのは改宗者、つまりユダヤ教に改宗する異邦人だけでし

たが、人々はヨハネによってヨルダン川で水に沈められ、象徴的に自分の罪を洗い流してもらいました。そのとき彼らは自分の罪を告白し、はっきりと口に出して、それを悔やみました。かつてイスラエルが紅海を通ってエジプトから逃れたように、彼らはバプテスマによって罪の世界を後にしました。かつてイスラエルはヨルダン川を通ってカナンの地に入りましたが、今もそれはイスラエルにとって新しい始まりを意味しました。少なくともその一部にとっては。ヨハネは何の快適さもない生活をしていました。荒野にただ一人で。彼はらくだの毛でできた簡素な衣をまとい、革の帯で締めていました。彼はいなごと野蜜で生きていました。預言者エリヤのように。キリストの、メシアの先触れとして、彼は皆が知るべきことを叫びました。「私の後に、私の務めが終わったとき、私よりも力のある方が来られます。その方はあまりにも偉大で栄光に満ちているので、私はかがんでその方の履き物のひもを解く値打ちさえありません。私はあなたがたを水に沈めました。しかし、その方はあなたがたに聖霊によってバプテスマを授けられます。預言者たちが告げたとおりに。あなたがたに必要なのは清めと赦しだけではなく、神に仕えるための力も必要だからです。」

ヨハネがイエスにバプテスマを授ける

そして、それは起こりました。ヨハネが告げていたにもかかわらず、突然、思いがけなく。神の子イエスが、ヨハネと同じ年ごろの男性、ガリラヤのナザレから来た彼の親類が、突然ヨハネのそばに立っていました。ヨルダン川のほとりへ彼のもとに出て来た人々の中に。そしてこの方は、メシアであって、ほかの人たちのような罪人ではないのに、ヨハネからバプテスマを受けられました。こうしてメシアは、新しく始めたいと願う人たちの側に立ち、彼らの先頭に立って進む方となられました。かつてイスラエルをカナンの地へと導いたヨシュアのように。ヨハネとイエスがヨルダン川から上がって来たとき、不思議なことに天が裂け、聖霊がこの方の上に降って来ました。鳩が上から人の上に舞い降りるように、目に見える形で。そして上から、イエスに語りかける声が聞こえました。「**あなただけが、わたしの心から愛する子、わたしのすべて、あなたはわたしの喜びのすべてだ**！」 この方はすでに

30年、神のみこころにかなって生きてこられました。けれども今、公の働きの時が来たのです。それはわずか3年半となるはずでした。そうです、天が裂けたのは、イザヤがかたくなな心と、イスラエルに対する異国の民の力に絶望して叫んだ、イザヤ書64章1節の祈りへの答えでした。神は、悲惨を転じるために、事態をひっくり返してふたたび治めるために、御霊によってメシアの上に来られました。それはイスラエルの人々の心の中で始まるはずでした。

イエス、仕える生涯

イエスにおける神の勝利についての良い知らせの前には、戦いがあります。それはバプテスマの直後に始まります。この方の上に降って来た御霊が、すぐにこの方をユダヤの荒野へと追いやるからです。この方はそこに四十日いました。かつてイスラエルが40年荒野にいたように。サタン、すなわち悪魔であり神の敵である者が、この期間にこの方を誘惑しようとしました。妥協と不従順によって、この方が人々をめぐるこの戦いを放棄するように、と。この日々、この方はただ一人でした。この方の前のバプテスマのヨハネのように。この方は野の獣たちと一緒にいました。けれども、神の御使いたちが守りと励ましのためにこの方に仕えていました。天の父は、こうしてご自分がそこにおられることを、この方に知らせたのです。**人々と地全体を救うための戦いのこの最初の重要な部分を、神の御子はご自分のために、そしてそれによって私たちのために、勝ち取られました。** バプテスマのヨハネが死に引き渡され、その声が途絶えた後、イエスはガリラヤに戻られました。この方はそのときから、神の王国の良い知らせを宣べ伝えられました。「時は今、来た。そうだ、預言されていたことが成就する。神の王国が近づき、力をもってこの世界に突入して来る。今こそ考えを改め、悔い改め、罪を捨て、神の勝利についての良い知らせを信じる時だ。」 こうしてのみ、人は王としての支配のもとに、神の祝福のもとに入るのです。この福音は教えや教義ではありません。一人の人格です。私たちのところに来られた神の子です。この方は、罪、病、恐れ、悪霊につかれること、死、そして悪魔に対する戦いを始められます。**この方は、イスラエルとすべての人を、罪とそのあ**

らゆる結果の捕囚から導き出すために、新しい、最終的な出エジプトを開始されるのです。

最初の弟子たち――イエスが漁師たちをご自分に従うよう招かれる

この方がガリラヤ湖のほとりを歩いておられると、二人の漁師、シモンとその兄弟アンデレが、湖で網を打っているのが見えます。そしてイエスは彼らに「**来て、わたしについて来なさい**」と言われました。「あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう。」 すると、すぐに、ためらうことなく、彼らは網を残してこの方について行きました。そして少し先に行くと、また二人の漁師が、自分たちの舟のそばで網を繕っていました。ゼベダイの子ヤコブと、その兄弟ヨハネです。この方は、ほかの二人と同じように彼らも招かれました。彼らもすぐにこの方について行き、父親を雇い人たちと一緒に残して行きました。**「わたしについて来なさい」と、ただそう言うことのできたこの方は、いったいだれだったのでしょうか。** 次の数年のうちに、いや、まもなく、彼らはそれを知ることになります。当時の世界をひっくり返すことになるのが、自分たち、素朴な漁師たちであるとは、彼らは思いもしませんでした。彼らは、イエスが彼らとともに始めた働きを、引き継いでいくことになるのです。

カペナウムの会堂で

そしてイエスは弟子たちと一緒にカペナウムに入って行かれます。そして安息日にすぐ会堂に行かれました。教えの場所です。素朴な大工であるこの方が、そこで教えられました。皆はその言葉に驚きました。この方が、**権威**を持つ者のように教えられたからです。生き生きと、心に訴えるように、そうです、いのちの言葉でした。律法学者たちから知っていたものとは、まったく違っていました。彼らはモーセと自分たちの学者たちを引用することしかできませんでしたが、この方は、まるで知恵そのもののように、第二のモーセのように語られたのです。

この会堂に、汚れた、悪い霊につかれた人がいました。この霊はこの人を支配し、ふだんなら決してしないことをするように強いていました。霊は汚れていて、取りついた人々に、その人間らしさをまったくゆがめてしまうようなことをさせて、彼らを汚しました。この人、いや、悪い霊、この人の中にいる悪霊がイエスに言いました。「ナザレ人イエス、私たちとあなたに何の関係があるのですか。私たちを滅ぼしに来たのですか。私はあなたを知っていて、あなたがだれなのか、よくわかっています。**神の聖者**です！」 イエスは強く命じられました。「黙れ、この人から出て行け！」 この人から離れたくないと、霊はその人をあちこちに引きずり回し、大声で自分の敗北を叫びました。そしてその人から出て行きました。皆は驚き恐れました。だれも、そのようなことを一度も見たことがなかったからです。皆は互いに論じ合って言いました。「これはいったい何だ。これは何という新しい教えだ。私たちが無力である悪い霊たちにさえ、あらがえない権威をもって命じられると、彼らは従う、いや、この方の前から逃げ去るではないか。」 **この方が語られると、そのとおりになるのです。** そしてこの出来事は、野火のようにガリラヤ中に広まりました。

シモン・ペテロの家で

そしてすぐその後、彼らは会堂を出て、シモンとアンデレの家に入りました。ヤコブとヨハネも一緒でした。シモンのしゅうとめが熱を出して寝ていました。彼らは特に何かを期待するでもなく、そのことをイエスに話しました。少なくとも、この方には知っておいてほしかったのです。するとイエスは彼女のそばに行き、その手を取られました。すると熱はすぐに彼女を去りました。彼女はすぐに熱が引き、ただちに彼らをもてなし、食事を作りました。

夕方になり、日が沈むと、人々は病人や苦しんでいる人、悪い霊につかれた人をみな、この方のもとに連れて来ました。彼らはまだシモンの家にいて、人々は、いや、カペナウムの村のほとんど全体が、戸口に立っていました。そしてこの方は、さまざまな病気に苦しむ人々を、できるかぎり多く癒やされました。また、多くの悪霊を追い出されました。悪霊とは、目に見えな

い、汚れた、悪い霊のことです。そしてイエスは、悪霊たちがご自分のことを話すのを許されませんでした。彼らがこの方を知っていたからです。この方が人として地上に来られるずっと前から、彼らはこの方を知っていました。彼らは、この方が**神の聖者**であり、**人々を彼らから解放するために、人々のための戦いを始められた方であることを知っていたのです。そして病と罪からも解放するために。**

翌朝、とても早く、皆がまだ眠っていて、まだ暗いうちに、この方はもう起きて出て行かれました。人里離れた寂しい所に行かれたのです。一人で祈るためです。この方は御父との交わりを求め、神の完全なしもべとして、力と知恵と導きを願い求められました。ペテロとほかの者たちは、この方が家にいないことに気づくと、捜しに出かけました。そして見つけると、この方に言いました。「皆があなたを捜しています。」 しかしこの方は言われました。「ほかの町や村にも行こう。そこでも福音を宣べ伝えるために。わたしはそのために来たのだから。わたしは一つの所にとどまっていることはできない。もっと多くの人が良い知らせを聞かなければならない。」 そして彼らが行ったすべての町や村で、この方は会堂に入り、福音を、良い知らせを宣べ伝え、悪霊を追い出されました。

道にいたツァラアトに冒された人

途中で、ツァラアトに冒された人がこの方のもとにやって来ます。町の外の道でのことです。彼は決して町に入ることを許されていなかったからです。彼はこの方の前にひれ伏して懇願します。「お心一つで、あなたは私のツァラアトをきよくすることがおできになります！」 イエスは、この必死の助けを求める叫びに、そしてまたその確信にも、心の奥深くで動かされました。この方は深いあわれみといつくしみをもって手を伸ばされました。**この方は彼に触れられた**のです。このきわめて感染力の強い皮膚病が自分にうつるのではないかという恐れは、まったくありませんでした。イエスは言われました。「わたしの心だ。きよくなれ！」 するとすぐにツァラアトは消え、彼はすっかりきよくなりました。生きながら死を宣告されていた彼が、いのちを取り戻したのです。そしてイエスは、黙っているように厳しく命じ、祭司の

ところへ彼を送り出されました。レビ記14章にあるモーセの定めに従って、祭司のところへ行き、きよめのささげ物をささげ、祭司からきよいと宣言してもらうように、と。ところが彼は出て行って、あちこちでそのことを話しました。そうです、彼は黙っていられず、どこででも自分の癒やしを喜び祝ったのです。

その結果、イエスはもはや公然と町に入ることができなくなりました。それでイエスは、町の外の寂しい所におられました。けれども、そこにも人々が四方からこの方のもとに押し寄せて来ました。

これらの出来事の中で、何があなたに語りかけ、何があなたの心に触れるでしょうか。

あなたにとって新しいことは何でしょうか。

自分の生活の中で実行したいと思うことを、何か学びましたか。

イエスのどんなところに心が躍りますか。

あなたは何のために祈りますか。ここでイエスについて読んだことを通して、イエスを礼拝してください！ この方に、あなたの感嘆の思いを言い表してください！

疑問がありますか。何かはっきりしないことがありますか。――書き留めてください！

2章

中風の人の赦しと癒やし

数日後、この方は再びカペナウムに行かれました。ある家に入られたのです。それが町に知れわたりました。そしてまた皆がやって来ました。彼らは戸口にも、どこにでも立っていて、もう通り抜けることができないほどでした。イエスは彼らに神のことばを、神の王国についての良い知らせを語っておられました。そこへ、**四人の男が、中風の人を寝床ごと担いで**、イエスのもとに連れて来ようとしました。けれども大勢の群衆のために、イエスのところまで近づくことができませんでした。彼らはためらわず、その人と一緒に家の屋根に上り、わらと土でできた屋根をはがしました。簡単に修理できる、素朴な屋根でした。そして彼らは、その穴から中風の人を、イエスのおられる家の中へとつり降ろしました。この方の足もとに、まっすぐに。劇的な行動です。言葉のない、癒やしの願いです。この方は、この男たちのしたことと、この方がこの人を癒やすことができるという彼らの信仰を見て、中風の人に言われました。「**子よ、あなたの罪は赦された**！」 見ていた皆は、もしかすると屋根を壊したことを言っておられるのだろう、と思いました。けれどもこの言葉は、はるかに深いところに届き、はるかに多くのことを意味していました。彼は赦しを求めてイエスのもとに来たわけではありませんでしたが、イエスはまず、人間が必要とするいちばん大切なものを彼に与えられます。心の癒やしと、清い良心です。神の赦しは、いちばん大切なものです。そして人と人とのあいだの赦しは、平和のいちばん力強い種です。そこには律法学者たちが座っていて、この言葉にあぜんとしました。この人は何を言っているのか。神を冒瀆している。罪を赦すことができるのは、神おひとりのほかにだれがいるだろうか。彼は祭司のところに行かなければならず、そこでいけにえとともにだけ赦しを受けることができるのだ。彼らは心の中でそう考えていました。イエスは、彼らの反応をすぐにご自分の霊で見抜かれました。「あなたがたは心の中で何を考えているのか。この人に『あ

なたの罪は赦された』と言うのと、『起きて寝床を担いで歩け』と言うのと、どちらがやさしいと思うか。しかし、人の子が、天におられる神と同じように、地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたが知るために」――この方は中風の人に言われます――「起きなさい。寝床を担いで家に帰りなさい。」 すると中風の人はすぐに起き上がり、寝床を担ぎました。家の中と家の前に集まっていた皆の前で、彼は健やかに、癒やされて、彼らのそばを通り過ぎて行きました。皆は感激のあまり我を忘れ、神をほめたたえました。この奇跡を起こすことができたのは、神だけだったからです。そして実際、神がその家の中に立っておられたのです。ただ彼らはそれを知らなかったのです。彼らはこのようなことを、それまで一度も見たことがありませんでした。

取税人レビ

それからイエスと弟子たちは、再び近くの湖のほとりに行きました。また群衆がみな、この方のもとにやって来ました。この方はそこで、彼らが一度も聞いたことのない言葉で、神のことを彼らに教えられました。そこへ行く途中、この方は、アルパヨの子レビが収税所に座っているのを見かけられました。そこは、ヘロデの息子たちの一つの統治区域から、別の統治区域へと移る境目でした。それは、ローマ人に守られた、憎まれる職業でした。だれもこの税を払いたくはありませんでした。とりわけ、自分たちの同胞のだれかに払うのは嫌でした。イスラエル人である彼は、裏切り者のように避けられていました。

イエスは、前にほかの弟子たちに言われたように、彼に言われました。「**わたしについて来なさい**！」 自分に関心を持ってくれる人がいて、しかも自分の名前で個人的に呼びかけてくれたことにすっかり面食らって、彼はすぐに立ち上がり、永久に自分の荷物をまとめて、この方について行きました。そしてレビ、つまりマタイは、イエスを自分の家に招き、楽しい宴会を始めました。彼の同業者たちもたくさん加わりました。そして彼らはくつろいで食卓に着きました。イエスと弟子たちが、取税人や罪人たちと一緒に。会堂から締め出されていた人々です。彼らは町で知られていて、避けられていまし

た。彼らの多くがこの方について行きました。この方のあわれみを見て、この方に引き寄せられたからです。律法学者とパリサイ人たちはそれを見ると、またしても愕然としました。どうしてこの人は、こんな人たちと一緒に祝うことができるのか。彼らはそれを弟子たちに言いました。この方に直接言う勇気がなかったからです。けれどもイエスはそれを聞いて言われました。「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人です。どうして医者が健康な人のところにだけいるべきでしょうか。**わたしは、イスラエルのために、そして全世界のために、救いと癒やしをもたらすために来たのです。** わたしは、罪人を王国へ招くために来ました。正しい人を招くためではありません。あるいは、自分は正しいと思っている人を招くためでもありません。罪人は罪人のままでいてはなりません。わたしは赦しと心の癒やしをもたらします。わたしは悔い改めを説くだけではなく、彼らの友ともなり、彼らと食卓をともにするのです。」

断食についてのイエスの言葉

バプテスマのヨハネの弟子たちとパリサイ人の弟子たちは、断食をしていました。彼らは一定の期間、食べ物を口にしませんでした。彼らはイエスに、なぜあなたの弟子たちは断食をしないのか、と尋ねました。そこでこの方は彼らに答えられました。「花婿が一緒にいる間、婚礼の客たちが断食できるでしょうか。花婿が一緒にいる間は、本当に断食などできないのです。しかし、彼らが断食をする日が来ます。それは、花婿が彼らから取り去られるとき、そうです、律法学者とパリサイ人たちが花婿を殺し、それで婚礼の祝いを終わらせることができると思い込むときです。」 大いなる婚礼の宴は、キリストによって造られる神の新しい世界を描いた、すばらしい絵です。だれもが十二分に持ち、すべての人に平和と正義がある新しい世界です。「だれも、新しい布切れで古い衣に継ぎを当てたりはしません。そんなことをすれば、新しい継ぎ切れが、新しいものが古い擦り切れた布から引きちぎれ、破れは前よりもひどくなります。まだ発酵している新しいぶどう酒を、古い皮袋に入れる人もいません。新しいぶどう酒が古い皮袋を張り裂いてしまうからです。そうなれば、両方ともだめになります。新しいぶどう酒は、新しい

皮袋に入れるものです。」 **イエスがもたらしたのは、まったく新しいものでした。癒やし、赦し、あわれみ、除け者にされた人々への近さ、そして新しく始める機会です。** それは、律法学者とパリサイ人たちの凝り固まった考え方や言い伝えには収まりませんでした。彼らは古いものを、とうの昔に、数えきれない命令や禁止や不必要な伝統から成る人間的な体系へと膨れ上がらせていました。こうして彼らは、モーセからも聖書からも離れてしまっていたのです。けれども、罪人を交わりからいつまでも締め出すことは、イエスの恵みのうちに終わりを迎えました。イエスは、当時のユダヤ人たちに、そして今日のすべての人に、この方に耳を傾け、この方について行くようにと挑まれました。いのちそのものであり、新しいいのちを与えてくださる方に。すべての人のために、とりわけ追い出された人、拒まれた人、罪人のために。新しいものがこの方のうちに始まり、古いものは道を譲り、後に残されなければなりませんでした。

安息日についてのイエスの言葉

安息日に、イエスは麦畑を通って行かれました。弟子たちも一緒で、歩きながら穂を摘んでいました。するとパリサイ人たちがこの方に言いました。「ご覧なさい。あなたの弟子たちは、してはならないことをしています。」ほかの人がそうしていたとしても、彼らはどうでもよかったでしょう。けれどもイエスと弟子たちのことは、この方を訴える何かを見つけようと、しっかり見張っていたのです。そこでこの方は彼らに言われました。「ダビデと、彼と一緒にいた者たちがひどく空腹になったとき、ダビデが何をしたか、あなたがたは読んだことがないのですか。大祭司エビアタルの時代に、彼が神の家に入って、祭司以外はだれも食べてはならない臨在のパンを食べたことを。そして彼は、一緒にいた皆にもそれを与えたのです。」 この方は彼らに言われました。「安息日は、人が大変な一週間の後に休み、神に感謝できるように、人のために造られました。人が安息日のために造られたのではありません。安息日は人のために与えられたのです。人のほうが先にいたのです。あなたがたは知っておきなさい。人の子は安息日の主です。」 イエスはここで、ご自分が、まだ認められておらず、まだ冠をかぶって王座に着

いてもいない王、ダビデの子であることを、間接的に示されました。そして安息日の主として、この方は安息日を造られた方でもあったのです。

これらの出来事の中で、何があなたに語りかけ、何があなたの心に触れるでしょうか。

あなたにとって新しいことは何でしょうか。

自分の生活の中で実行したいと思うことを、何か学びましたか。

あなたは何のために祈りますか。ここでイエスについて読んだことを通して、イエスを礼拝してください！

3章

安息日に会堂で癒やす

そしてこの方は、再びカペナウムの会堂に入られました。同じ日、安息日のことです。そこに、片手がひからびて動かなくなった人がいました。人々は、この方が安息日にその人を癒やすかどうか、じっとうかがっていました。この方にそれができることは、彼らにはもうわかっていましたが、今の彼らにとって、それは何の意味もありませんでした。彼らは、この方を訴える理由を必死に探していたからです。そしてイエスは、手のなえたその人に言われます。「ここに来て、真ん中に立ちなさい。皆にあなたが見えるように。」 それから、ご自分を待ち伏せしている人たちに言われました。「安息日に許されているのは、善を行うことですか、それとも悪を行うことですか。いのちを救うことですか、それとも助けを怠って殺すことですか。」 彼らは言葉もなく座り、黙っていました。この良心の問いに、彼らに何が言えたでしょうか。もし自分自身が助けを必要とし、それを安息日に受けられるとしたら、どうでしょうか。そこでこの方は、黙って座っている彼ら皆を見回されました。**どんなときにも善を行わなければならない**こと、そして安息日であろうとなかろうと、何の疑問もなく、いつでも、どんなときにもいのちを救わなければならないことを、口にすることのできない彼らを。この方は怒りをもって、彼らを、その場の全員を見回されました。この方は、しなびた手ののろいで彼らを罰したりはされませんでした。いいえ、この方は彼らの心のかたくなさと頑固さを、深く悲しまれたのです。それからこの方は真ん中にいる人に目を向け、言われました。「手を伸ばしなさい！」 彼が手を伸ばすと、その手はたちまち元どおりになりました。この方は善を行い、彼らはそれを妨げようとしたのです。

すると律法学者たちは怒りに燃えて出て行き、政治的な指導者であるヘロデ党の者たちと、どうやってこの方を殺そうかと相談しました。彼ら自身には自分たちの意図を実行する権限がなく、政治的な権力と手を結ばなければな

りませんでしたが、まずはその権力を説得しなければなりませんでした。いずれにしても彼らの決意は固まっていて、問題は、いつ手を下すことができるかだけでした。

ゲネサレ湖のほとりでの大勢の癒やし

そしてイエスは、弟子たちと一緒に湖のほうへ立ち去られました。ガリラヤから、またユダヤとエルサレムから、大勢の群衆がついて来ました。イドマヤからも、ヨルダンの川向こうからも、ツロとシドンのあたりからも来ました。本当に大勢でした。彼らは、この方が何をしておられるか、そしてただの一人も追い返されないことを聞いていたのです。だから皆がやって来ました。それは大騒ぎになりました。この群衆に押しつぶされないように、この方は弟子たちに、小舟を用意しておくように言われました。この方は、やって来る人をみな癒やしておられたからです。群衆が押し寄せて来ました。そして彼らは、この方にさわろうとして、ほかの人を乗り越えてまでこの方に飛びかかって来ました。悪霊につかれた人たちが来ると、彼らはこの方の前にひれ伏し、ひざまずきました。そして、その人たちの中にいる汚れた霊たちは、おびえていらだちながら叫びました。「あなたは神の子です！」 彼らが見抜いていたことは、彼らの助けにはならず、また彼らにとって好ましいことでもありませんでした。彼らは無力だったからです。彼らは、自分たちの敗北の時が来たことを感じ取っていました。この戦いに負けることを予感していました。だから彼らは、こうした言葉によって、この方を支配しておこうとしたのです。

けれども彼らは、イエスについての真理を告げ知らせるように定められてはいませんでした。また、その時もまだ熟していませんでした。そしてイエスは、ご自分がだれであるかを彼らが公にしないよう、厳しく戒められました。

イエスが十二人の弟子を任命される

それからこの方は山に登り、ご自分が望む者たちをみな呼び寄せられました。すると彼らはこの方のもとに来ました。それは、ただ癒やしを求めて来

た人々ではなく、この方に従う人たちでした。その中からこの方は十二人を選ばれました。この者たちはこの方とともにいるはずでした。彼らは、整えられるために、イエスが体験されたことを学び、体験するはずでした。この方は彼らを遣わして、ご自分がしておられることをさせるおつもりでした。宣べ伝えること、そして権威をもって悪い霊、悪霊を追い出すことです。戦いは続きます。イエスお一人では人間として限りがあり、いつの日か目に見える形では彼らとともにおられなくなるので、この召しと働きは広げられなければなりませんでした。そしてこの方は彼らの中から十二人を選ばれました。イスラエルの十二部族のように。十二人の使徒たちのうちに、神がイスラエル全体を見つめておられること、そして王国におけるイスラエルの回復が先に見すえられていることが、目に見えるようになります。問題は癒やしの使命だけではなく、あらゆる面での刷新なのです。**十二人**は次のとおりです。

- シモン。この方は彼にペテロ（岩）という名をつけられた
- ゼベダイの子ヤコブ
- ヤコブの兄弟ヨハネ。この二人を、この方はボアネルゲ、すなわち雷の子と名づけられた。
- アンデレ
- ピリポ
- バルトロマイ
- マタイ
- トマス
- アルパヨの子ヤコブ
- タダイ
- 熱心党のシモン
- イスカリオテのユダ。このユダがイエスを引き渡したのである。

メシアの家族——その一

イエスはある家に入られます。そしてまた、大勢の人々がこの方のもとにやって来ます。この方も弟子たちも、パンを食べる暇さえありません。それを聞いたこの方の家族は、この方を捜しに出かけました。彼らは、自分たちの兄弟をめぐる騒ぎにうんざりしていたのです。彼らは、この方は完全に頭がおかしくなった、と言いました。人々に指さされ、彼らは恥ずかしい思いをしていました。

御霊を冒瀆すること

エルサレムから、重要な律法学者たちが下って来ていました。彼らは、起こっていることを聞き、また見ていました。彼らは、かつてないほど性急に、厳しくこの方を断罪しました。「この人の中ではベルゼブル、悪霊どものかしらが働いている。そのかしらとその力によって、彼は悪霊につかれた人たちから悪霊を追い出しているのだ。」 そこでイエスは彼らを呼び寄せ、たとえで彼らに語られました。「どうしてサタンがサタンを追い出せるでしょうか。もし国が内部で争うなら、その国は立ち行きません。もし家が内部で分裂しているなら、その家は立ち行きません。もしサタン、悪霊どものかしらが自分自身に逆らって立ち、自分自身と戦っているなら、彼は生き延びることができません。それは彼の終わりでしょう。だれも、まず強い者を打ち負かして縛り上げなければ、その強い者の家に押し入って家財を奪うことはできません。そうして初めて、その家を略奪できるのです。**わたしこそ勝利者**であり、あなたがたが見ているように、家財を奪い始めているのです。

「まことに、あなたがたに言います。人の子らは、どんな罪も、またどんな冒瀆も赦していただけます。しかし、わたしが悪霊を追い出すその力である聖霊を冒瀆する者は、永遠に赦されません。その人は、こうして永遠の罪に定められるのです。」 彼らの冒瀆とは、イエスが汚れた霊に取りつかれていて、その力でこれらすべてのことを行っているのだ、と言いがかりをつけたことでした。それを信じ、そこにとどまり続ける者は、悔い改めなしには赦しを受けることがありません。

メシアの家族——その二

そのあいだに、この方の母と兄弟たちが到着し、戸口の外に立っていました。人々はこの方の周りに座って、この方の話を聞いていました。そのとき、知らせがこの方のもとに届きました。「あなたのお母さんと兄弟姉妹が外に立って、あなたを捜しておられます。」 するとこの方は彼らに答えられました。「わたしの母、わたしの兄弟姉妹とはだれでしょうか。」 そしてこの方は周りを見回し、ご自分の周りに座っている人たち皆を見つめられました。それから言われました。「見なさい。あなたがたは皆、わたしの母、わたしの兄弟です！ **だれでも神のみこころを行う人、その人こそわたしの兄弟、わたしの姉妹、わたしの母なのです**！」

これこそ神のまことの家族です。2000年後の今日、全地に広がり、いつの日か父の家で暮らすことになる家族です。永遠に、神の家族として。

これらの出来事の中で、何があなたに語りかけ、何があなたの心に触れるでしょうか。

あなたにとって新しいことは何でしょうか。

何かを学びましたか。もしかすると、自分の生活の中で実行したいと思うことも学んだでしょうか。

あなたは何のために祈りますか。ここでイエスについて読んだことを通して、イエスを礼拝してください！

疑問がありますか。何かはっきりしないことがありますか。それなら書き留めてください！

4章

イエスはたとえによって神の王国を描き出される

種蒔く人と四種類の地のたとえ――「聞きなさい」

そしてイエスは、宣べ伝えるという使命を続けられました。またしてもゲネサレ湖のほとりでのことです。ますます多くの人々がやって来ました。押しつぶされないように、それでいてできるだけ多くの人々に届くように、この方は小舟に乗り、岸から数メートル漕ぎ出されました。まるで円形劇場のように、この方は多くの人々に届きました。水面が、この方の言葉を聞いているすべての人へと運んでいきました。そしてこの方は、人々と弟子たちに、たとえ、つまり比喩を用いて多くのことを教えられました。その教えの中で、この方は彼らに言われました。「**聞きなさい**！ 想像してみてください。農夫が種を持って畑に出て行き、できるだけむらなく種をばらまいて蒔きます。そのとき、ある種は道端に落ちました。すると鳥が来て、すっかりついばんでしまいました。別の種は、土の少ない岩地に落ちました。そこでは種はすぐに芽を出し、伸びていきました。日が照りつけると、深い根がなかったので、若い芽はすぐに枯れてしまいました。

「別の種は茨の中に落ちました。茨もすぐに伸びて、伸びかけていた種は、茨の下でまたふさがれてしまいました。ここでも実はなりませんでした。それから、種が良い地に落ちました。それは芽を出し、高く伸びて、実を結びました。その量はさまざまでした。ある穂は30粒、別の穂は60粒、そしてまた別の穂はなんと100粒もの実をつけたのです。**聞く耳のある者は、よく注意して、心を開いて聞きなさい**！」 後になって人々が皆家に帰ってしまうと、十二人と、まだこの方の周りにいた人たちが皆、この方に尋ねました。「これらのたとえは何を意味しているのですか。何を言おうとしておられるのですか。」 すると、ご自身が神の種蒔く人であるこの方は、彼らに言われました。「わたしとともにいて、わたしについて来るあなたがたには、神の王国の奥義を理解することが与えられています。あなたがたにとって、それ

はもはや奥義ではなく、知識であり理解です。あなたがたに明かされているからです。しかし外にいる人たち、開いた心で本当に耳を傾けようとしない人たちには、それはたとえで語られます。イザヤ書6章10節がすでに言っているとおりです。『彼らが見るには見るが知ることはなく、聞くには聞くが悟ることはないため。彼らが立ち返って赦されることのないため。』 わたしの言うことを聞き、わたしのすることを見ていながら、かたくなで固くなっている心がたくさんあります。けれども、彼らが信じるためには、いったいどれほどのことが起こらなければならないのでしょうか。」

そしてこの方は彼らに言われます。「このたとえがわからないのですか。それでは、ほかのたとえはどうやって理解するつもりですか。種蒔く人は、わたしがしているように、神のことばを宣べ伝え、伝えることによって、それが心の中に、そうです、心という地に落ちるように蒔きます。道端の人たちとは、みことばを聞きはしても、サタン、すなわち悪魔が来て、みことばを取り去ってしまい、何も残らない人たちのことです。サタンは、神の王としての支配がすべての人へと突き進んでいくのを、何としても阻もうとしています。神のことば、良い知らせを、喜んで受け入れる人たちもいます。それが、土の少ない岩地に落ちる種です。この人たちには根がなく、移り気で、その場かぎりの人たちです。福音のために、苦難や迫害によって信仰が試されると、彼らはすっかり面食らいます。そして失望して、信仰をまた投げ捨ててしまいます。それから、茨の中に蒔かれた人たちがいます。みことばは彼らの心に届き、育ち始めます。けれども、やがて人生の思い煩いがやって来ます。すぐに片づく解決などないのに、彼らはもしかすると福音によってそれを期待していたのかもしれません。また、富や出世の誘惑が、人生の目標をみことばからそらしてしまいます。いろいろなものへの欲望が、人生の中に場所を占めるようになります。そうしたものが、福音のことばをふさいでしまうのです。それは、ほんの短い目覚めにすぎませんでした。そして、みことばが良い地に出会う人たちがいます。悔い改めと忠実さへの備えがあり、みことばが受け入れられて実を結び、ほかの何よりもそれが大切だという人たちです。困難や疑問があっても、そうなのです。このような人たちは

実を結びます。ある人は三十倍、ある人は六十倍、あるいは百倍の実を。神ご自身が彼らのうちで育て、実らせてくださる実です。」

あかりのたとえ

イエスは彼らに言われました。「あかりは、升の下や寝台の下に置くためのものではありません。すべてを明るく照らす場所に置かなければなりません。暗闇に隠されているものはみな、いつか明らかにされ、秘められているものもみな、光のもとに出て来ます。

「わたしのメッセージ、御国の福音は、隠されたままではありません。わたしがよみがえって、わたしの父の王座に着くとき、それは全世界へと運ばれていきます。

「聞く耳のある者は、よく注意して、心を開いて聞きなさい！

「あなたがたは、自分が量るその量りで量られ、分け与えられます。あなたがたがわたしをどう判断するか、それに応じて受けることになります。あなたがたがわたしを受け入れるなら、すべてを受けます。わたしを持っている人は、わたしからさらに多くのものを、そうです、すべてを受けます。わたしがだれなのかに好奇心を持つだけの人、わたしを信じず、わたしについて来ない人は、わたしへの関心をすべて失ってしまいます。そして神の王国にあずかることもありません。」

種がひとりでに育つたとえ

「神の王国は、人が出て行って地に種を蒔くようなものです。そうしたら、その人は、ただ待って、寝て、また起きることしかできません。しかも何度もです。種もまた、芽を出して育つまでは、まず土の中で眠っているのと同じです。種がどのように育つのか、それがどうして起こるのか、その人は知りません。地はひとりでに実をならせます――まるで復活のように――。初めに苗、次に穂、それから穂の中に麦の粒が実ります。穀物が実ると、その人は鎌を持って出かけ、収穫を刈り入れます。」 そうです、ヨエル書3章13節がすでに告げているように、収穫は刈り入れられるのです。小さな始まりは必要で、価値あるものです。そして決して軽んじてはなりません。育つに

は時間がかかります。神の王としての支配は、一気に目に見える形で、あらゆる所に現れるわけではありません。すべてのものは、熟し、育つのに時間がかかります。けれども、神が長く待ち望んでこられた収穫は必ず来ます。**そうです、それは必ず来ます。みことばを蒔き、忍耐して待ちなさい**！

いちばん小さなからし種のたとえ

そしてこの方は言われました。「神の王国を、ほかに何にたとえたらよいでしょうか。それは、いちばん小さく目立たない種として地に蒔かれる、からし種のようです。けれども、それは芽を出して大きくなります。どんな野菜よりも大きくなります。その木は枝を張り、その陰に鳥が巣を作るほど大きくなるのです。」 それは小さく始まりました。イエスと十二人とともに。けれども最後には、神の王国は全地に広がるのです。この方は、さらに多くのたとえで人々に語られました。けれども、たとえだけで語られました。弟子たちには、特別に、詳しくそれを説き明かされました。

イエスはゲネサレ湖の嵐を静められる

その日の夕方、イエスは弟子たちに言われます。「湖の向こう岸へ渡ろう。」 彼らは群衆に別れを告げました。弟子たちは舟の準備をし、イエスをそのままお乗せしました。疲れ果てたままのイエスを。ほかの舟も彼らについて来ました。すると、どこからともなく激しい突風が起こりました。高い所から強い吹き下ろしの風がやって来ました。敵の力のようにです。そうです、それは神の子への攻撃でした。波が舟に打ち込んで、舟はもう水でいっぱいになりかけていました。危険な状況です。イエスは舟の後ろのほうにおられました。天の父の守りがどんなときにもそこにあると信頼して、枕をして眠っておられたのです。弟子たちはこの方を起こし、責めるように言いました。「先生、私たちが死んでもかまわないのですか。」 イエスは眠りから目を覚まされました。この方は突風を叱りつけ、脅すように言われました。「黙れ、静まれ！」 すると、嵐はやって来たときと同じように、ぴたりとやみました。すっかり凪になりました。そしてこの方は彼らに言われました。「なぜ怖がるのですか。信仰がないのですか。わたしがここにいるではありませんか。」 すると弟子たちは、嵐を恐れたのと同じくらいに、ひどく恐れ

ました。そして彼らはおびえながら、互いにささやき合いました。**「湖も風もこの方に従うとは、この方はいったいどなたなのだろう。私たちはだれを相手にしているのだろう。」**

これらの出来事の中で、何があなたに語りかけ、何があなたの心に触れるでしょうか。

あなたにとって新しいことは何でしょうか。

何かを学びましたか。自分の生活の中で実行したいと思うことを。

あなたは何のために祈りますか。ここでイエスについて読んだことを通して、イエスを礼拝してください！

疑問がありますか。それとも何か理解できなかったことがありますか。書き留めてください！

5章

向こう岸のゲルゲサで、悪霊につかれた人が解放される

神は、ご自分を求めなかった者たちにご自分を現される（イザヤ書65章1〜5節）

彼らは舟で湖の向こう岸、ゲラサ人の地にやって来ます。当時そこはイスラエルではなく外国で、デカポリスでした。それは、シリア州にある十の町から成る地域でした。この方が舟から上がられると、すぐに一人の男がこの方を迎えにやって来ました。この男は汚れた霊を持っていて、それに取りつかれていました。彼は墓場の洞穴に、死者たちのそばに住んでいました。町の中では暮らせなかったのです。手がつけられず、皆にとって危険だったからです。鎖でさえ、彼を縛っておくことはできませんでした。人々はたびたび足かせをはめ、鎖で縛りましたが、彼はとても力が強く、そのたびにそれを引きちぎってしまいました。彼はまるで野獣のようだったので、彼を手なずけられるほど強い者はだれもいませんでした。昼も夜も、彼は墓場の洞穴や丘の上にいました。彼は汚れそのものが人の形をとった存在でした。彼は死体に執着していました。彼は生ける死を体現しています。彼は大声で叫び、石で自分の体を傷つけていました。裸で、孤立し、壊れきった人です。それは、今イエスに出会った、人間らしさをもっとも奪われた、もっとも惨めな人でした。

この男は、混沌の中で解放と癒やしを切に求めている世界全体を映し出す姿ではないでしょうか。

この男は遠くからイエスを見ると、この方のもとに駆け寄り、その前の地面にひれ伏しました。彼は大声で叫びましたが、それは汚れた霊の言葉でした。「いと高き神の子イエスよ、私とあなたに何の関係があるのですか。なぜここにいるのですか。私にはあなたに勝ち目はありません。あなたは強い方です。お願いです、私がこの男を苦しめてきたように、私を苦しめないで

ください！」 イエスが彼に「この男から出て行け、汚れた悪霊、苦しめる霊よ！」と言われたからです。そしてイエスは彼に尋ねられました。「汚れた霊よ、おまえの名は何か。」 彼は答えました。「私の名はレギオンです。私たちは大勢ですから。」 ローマの一個軍団（レギオン）は、6000人の兵士と120人の騎兵から成っていました。この男は、一つではなく、多くの悪霊に取りつかれていたのです。そして悪霊たちは、自分たちをこの地方から追い出さないでくださいと、何度もしきりにこの方に願いました。切り立った岸辺で、豚の大群が飼われていました。そして汚れた霊たちは、豚の中に入らせてくださいとこの方に願いました。彼らはいつも住みかを探しているのです。人間を、そしてほかに手がなければ動物をも。イエスはそれを彼らにお許しになりました。汚れた霊たちが、ユダヤ人にとって汚れた動物である豚の中に入ると、彼らは破壊的な働きを続けました。豚の群れは山を駆け下りて湖になだれ込み、みな溺れてしまいました。イエスがそう望まれたからではなく、悪霊たちがそう望んだからです。豚はおよそ2000匹でした。もしかすると、悪霊たちはそうして人々をイエスに敵対させようとしたのかもしれません。そして、それは成功しました。**けれども、この男は今やきよめられ、解放されていました。**豚飼いたちは、起こったことを見てうろたえ、逃げ出しました。彼らは町や村々でそれを伝えました。すると人々は、それを見ようと出て来ました。彼らはイエスのもとにやって来ます。彼らは自分の目を疑います。悪霊につかれていたその人が、服を着て、すっかり正気に返り、普通の人としてイエスのそばに座っているのです。レギオン、つまりおびただしい数の汚れた霊を宿していた男が、野獣のようではなく、再び人間になっているのです。人々の中に恐れが生じます。彼らには、それがまったく不気味なのです。そして、すべてを目の当たりにしていた人たちは、悪霊につかれた人の解放と、豚が湖になだれ込んだことを、後から来た人たちに話しました。すると人々は、喜ぶのでも、イエスを招くのでもなく、自分たちの地方から出て行ってくれるようにとこの方に願うのです。彼らは、外にいる人たち、見てはいても認めず、聞いてはいても悟らない人たちの一例です。イエスは再び舟のほうへ行き、乗り込まれました。この岸辺でのこの方の使命、異教の領域へのこの方の侵攻は、成功のうちに終わりました。来た

るべき王としての支配のしるしが、打ち立てられたのです。ガリラヤでと同じように、ここでもです。癒やされた男は、どうしてもイエスのそばにいたいと願いました。彼の親族たちとはまったく違っていました。この方について行きたかったのです。自分を解放してくださった方のそばに、いつまでもいたかったのです。けれどもイエスは、それをお許しになりませんでした。その代わりに、この方は彼に言われました。「あなたの家族のところに帰り、主があなたにどれほど大きなことをしてくださったか、どれほどあなたをあわれんでくださったかを知らせなさい。」 そこで彼は立ち去り、イエスが、いや、神が自分にどれほど大きなことをしてくださったかを、デカポリス全体に宣べ伝えました。そして、明らかにこれからもしてくださるつもりでおられることを。そうです、彼は、再び湖を渡って戻って行かれたイエスの宣教の働きを引き継いだのです。そして、それを聞いた人たちは皆、驚きました。しかも、失われた豚のことで腹を立てたよりも、もっと大きく驚いたのです。

この箇所の何があなたに語りかけ、何があなたの心に触れるでしょうか。

あなたにとって新しいことは何でしょうか。

毎日の生活のために、何かを学びましたか。

あなたは何のために祈りますか。ここでイエスについて読んだことを通して、イエスを礼拝してください！

疑問がありますか。それとも何か理解できなかったことがありますか。書き留めてください！

ヤイロの娘のよみがえり――その一

イエスは汚れた者たちに触れられる――彼らは再び生きることができる

向こう岸のカペナウムのあたりに着くと、いつものように、この方を見ようと大勢の人々が再び湖のほとりに集まりました。会堂司の一人であるヤイロもそこにいました。自分の地位や会堂司としての体面に関わる、あらゆるためらいや起こりうる危険をおしてのことでした。ある一つのことが彼を突き

動かしていたのです。この方を見ると、彼はそばに行って、その足もとにひれ伏しました。彼はしきりに願って言いました。「私にとってかけがえのない、私たちが心から愛している娘が、死にかけています。どうか娘の上に手を置いてやってください。娘が癒やされて生きられるように！」 イエスはヤイロの必死の思いをご覧になり、彼と一緒にその家へ向かわれました。人々はそれを聞き、ぎっしりと押し合う群衆がこの方について行きました。

長血をわずらう女

このぎっしりと押し合う群衆の中に、12年のあいだ止まらない長血をわずらっている一人の女がいました。そのため、彼女は律法によれば汚れた者でした。夫もなく、交わりもなく、いつも人々から隔てられていました。孤立し、孤独でした。彼女はひどく苦しみ、医者たちのもとで癒やしを見つけようと、あらゆることを試みてきました。それが彼女の財産をすべて食いつぶしてしまいました。そして、良くなるどころか、かえって悪くなっていました。けれども彼女は、決してその病を受け入れて心の中であきらめることはなく、癒やしを求め続けていました。今、彼女は、癒やし主であり、偉大な医者、いや、医者の中の医者であるイエスのことを聞いたのです。この方の衣にさわりさえすれば癒やされる、と彼女は確信していました。汚れた者として、彼女は決してこの方に直接話しかけることはできませんでした。人ごみの中で、彼女はうまく後ろからこの方に触れることができました。目立たないように、この方の顔を見ることもなく。そして、そのとおりになりました。彼女はたちまち癒やされたのです。彼女はそれを感じました。けれどもイエスも、あることを感じ取られました。すなわち、ご自分から出て行った癒やしの力です。この方は、触れられたことによって汚れたのではありませんでした。まったく逆だったのです。この方は**神の聖者**だったからです。そしてこの方はすぐに振り返って尋ねられました。「わたしの衣にさわったのはだれですか。」 ヤイロの家へ向かう途中で、それがこの方にとって、今そんなに大切なことだったのでしょうか。ヤイロの娘に残された時間は、少なくなっていました。なぜこの方は、今それを知ろうとされたのでしょうか。そうです、癒やされた人に、イエスがその人とその苦しみを知っておられる

ことを知ってほしかったのです。弟子たちは、あきれて言いました。「群衆があなたに押し迫っているのに、『だれがわたしにさわったのか』とお尋ねになるのですか。」 けれどもイエスは、ご自分に触れた人を見ようとして、周りを見回されました。女は、イエスが自分のことを言っておられるのだと気づき、怖くなりました。今はもう隠れていることはできず、彼女は震えながら、聖なる方の前にひざまずきました。彼女は、自分の身に起こったことを、そして、この方のもとにしか最後の望みを見いだせなかったことを、すべてこの方に話しました。するとこの方は彼女に答えられました。「**娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。そして、もう一度生き始めなさい。**あなたは病気から解放されて、健やかになりました。」 人生の人ごみがどれほど密でも、どれほど望みがなくても、あなたがどれほどふさわしくなくても、またそう感じていても、信仰をもってイエスに向かって手を伸ばしてください！ イエスといういのちの木から一枚の葉を取るように、癒やしを受け取ってください！

ヤイロの娘のよみがえり――その二

この方がまだ女と話しておられるうちに、会堂司の知人たちが、悪い知らせを持ってヤイロのところにやって来ます。「お嬢さんは亡くなりました。これ以上、先生を煩わすことがあるでしょうか。家に帰りましょう。」 イエスはそれを耳にして、ヤイロに言われました。「**恐れないで、ただ信じていなさい！ わたしに信頼しなさい！**」 それからこの方は、弟子たちのうちペテロとヤコブとヨハネだけを連れて行かれます。十二人のうちの内側の輪です。彼らはその家に着きます。騒ぎ、嘆きの叫びと泣き声が大きく響いています。イエスは尋ねられます。「なぜ騒いで、泣いているのですか。子どもは死んだのではありません。眠っているのです。」 すると、弔いに集まった人々はこの方をあざ笑いました。今日でも、人々がただイエスに信頼するときに、人々がそうするのと同じように。そこでイエスは、人々をみな外に出されました。父親と母親と三人の弟子たちだけが、少女のところに入ることを許されました。そしてイエスは子どもの手を取って言われます。「タリタ、クム。」 訳すと、「少女よ、あなたに言う。起きる時が来たのだ」という意

味です。すると少女はすぐに起き上がり、歩き回りました。いのちと力が戻ってきたのです。少女は12歳でした。人々は我を忘れて驚き、その喜びを言葉にすることができませんでした。そしてイエスは、その部屋でそれを見た人たち皆に、このことをだれにも話さないように命じられました。この方は、不思議な死人のよみがえらせ手として知られたいとは思われませんでした。そうではなく、神の王国が形をとるように、心を変え、よみがえらせようとする方として知られたかったのです。そしてこの方は、病気の後で元気になるように、少女に食べ物を与えるようにと望まれました。**イエスは、不治の病に向き合われたのと同じように、死に向き合われます。そして勝利されます。全被造物を奴隷として縛りつけている死は、まもなく、よみがえられた方のいのちに道を譲らなければなりません。神の王国は来ます。とどめようもなく。イエスがおられた所では、何ひとつ元のままではありません。この方が来られたので、すべてが新しくなるのです。**

これらの出来事の中で、何があなたに語りかけ、何があなたの心に触れるでしょうか。

あなたにとって新しいことは何でしょうか。

何かを学びましたか。自分の生活の中で実行したいと思うことを。

あなたは何のために祈りますか。ここでイエスについて読んだことを通して、イエスを礼拝してください！

この箇所について疑問がありますか。何かはっきりしないことがありますか。書き留めてください！

6章

イエスの故郷ナザレでの不信仰

この方はそこを去って、家族とともに育った町、郷里のナザレへ行かれました。弟子たちもついて行きました。安息日になると、この方はいつものように、またほかのユダヤ人たちと同じように会堂に入り、教え始められました。この方は律法学者たちとは違って権威をもって教えられたので、聞いていた人たちは驚きのあまり我を忘れました。そして彼らは言いました。「この人は、こういうことをどこから得たのだろう。この人に与えられた知恵は何なのだろう。そして、この人の手で行われる、あの並外れた力あるわざは何なのだろう。これは、律法学者でも何でもない、あのただの職人ではないか。父親はもう亡くなっていて、マリアの息子ではないか。ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄ではないか。それに、妹たちもここで私たちと一緒に町にいるではないか。」（彼らは、この方は頭がおかしくなったと思って、すでにこの方を追いかけて来たことがありました。） こうして彼らはこの方につまずきました。この方に対する彼らの、一見好意的な態度は変わってしまいました。彼らはこの方を知っていながら、知らなかったのです。これらすべてのことが、自分たちにとって個人的に何を意味するのかを、彼らは自問しませんでした。そうしていたなら、あの知恵がすべてどこから来ているのか、わかったはずです。そしてイエスは彼らに言われました。「預言者は敬われ、耳を傾けてもらえます。しかし、自分の郷里、自分の親族、自分の家では、そうではありません。」 彼らは、それが自分たちのことだとは気づきませんでした。そしてこの方は、そこでは力あるわざを行うことができませんでした。彼らがこの方に対して懐疑的で、いや、拒絶的だったからです。**彼らにとって、この方はただの職人にすぎなかったのです**。

それでも、そこには幾人かの弱い人たち、病人たちがいて、この方は彼らに手を置いて癒やされました。この方のもとに来た人、あるいは連れて来られた人たちです。**この方はナザレの人々の不信仰に驚かれました**。この方はい

つも不信仰に出会われましたが、それでも人々が来たので癒やされました。けれどもここでは、ほとんどの人が家にとどまっていました。この方がだれであるか、そして自分たちのところでもこの方が何をすることができ、何をするつもりでおられるかを、彼らが認めなかったからです。ただの職人が実は神の子であるというこのつまずきに耐えられない人は、イエス・キリストのまことの認識にまで達することはありません。それからこの方は、周りの村々を巡って、人々に御国の福音を教えられました。

十二人の派遣

それからこの方は、はっきりとした意図をもって十二人を呼び寄せます。この方は彼らを二人ずつの組にされました。この方が、互いに合うとお考えになったとおりに。二人一組なら、互いに支え合い、守り合い、励まし合うことができました。そしてこの方は、彼らを周辺の地域へと遣わし、ご自分がしておられることを行わせました。この方は、汚れた霊、悪霊を追い出し、イエスによる王としての支配の始まりを示すための権威を、彼らに与えられたからです。それには、悔い改めと立ち返りを宣べ伝えることも含まれていました。この方は、何も持って行かないように彼らに指示されました。食料も、袋も、お金も持たずに。杖一本だけです。モーセの杖や、預言者の杖のように。彼らはイスラエルを神の御前へと連れ戻すはずでした。そして、足には履き物を履いているように、と。また、下着も二枚ではなく、一枚だけです。彼らは、この方ご自身と同じように、ただ神だけに信頼するはずでした。何も持たない貧しい者として出て行くはずでした。貧しい人たちのところへ。**悔い改めは、彼ら自身の生活にも目に見える形で現れなければなりませんでした。彼ら自身と彼らの振る舞いが、人々が彼らのメッセージを拒む理由になってはなりませんでした。彼らの安全や、生活の必要や、快適さが、その派遣において第一になってはならなかったのです。** それは、急を要する使命、すぐに、大がかりな準備もなしに果たされるべき使命でした。イエスがここガリラヤにおられた、この時のための特別な派遣でした。昇天のとき、この方は彼らを再び遣わされました。そして彼らとともに、今日イエスに従うすべての人を。私たちの時代に、ほかの国々で、ほかの条件のもと

で。当時と同じように大切なのは、御国の福音を宣べ伝えることです。立ち返りを、そしてまた、霊と魂とからだの癒やしによる回復をです。「派遣先で、貧しい家であれ裕福な家であれ、ある家に招かれ、耳と心が開かれるなら、そこに入り、次へ移る時が来るまでとどまりなさい。次へ移りなさい。できるだけ多くの人が聞くべきだからです。しかし、人々があなたがたに耳を傾けず、家に招き入れない所では、履き物のちりを払い落としなさい。福音はどうでもよいものではないことを、彼らは知らなければなりません。それは急を要する恵みのメッセージです。それを拒むのは大きな過ちです。神の王としての支配に対しては、『はい』か『いいえ』しかありません。」 そこで彼らは出て行き、悔い改めを、神へと向かう考えの転換を告げ知らせました。彼らは多くの悪霊を追い出しました。多くの病人に油を塗って癒やしました。イエスがおられる所、そして彼らがいる所、そこに神の王国がありました。彼らの行いがそれを証明していました。彼らはイエスの権威のうちに出かけて行ったのです。この方の名において。今日、どこであれ扉が開かれる所、機会が生まれる所では、時を失わず、すぐに行動しなければなりません！

バプテスマのヨハネが首をはねられる

弟子たちは霊的な権威を受けましたが、彼らは、そして今日に至るまでイエスに従う者たちは、あらゆることを覚悟しなければなりませんでした。イエスを王として宣べ伝える者は、支配者や王やカエサルたち、律法学者やパリサイ人たちの世界で、抵抗にぶつかります。バプテスマのヨハネの身に起こったのも、そういうことでした。彼の物語は、このすさまじい出来事によって、**この世とその王たちの本質**と、**イエスの本質**とを私たちにはっきりと示します。ベツレヘムの幼児殺しを命じたヘロデ大王の息子、ヘロデ・アンティパス王は、イエスのことと、人々がこの方について言っていることを耳にしました。庶民の人々は、この方について、ヘロデを不安にさせるようなことを言っていました。自分が処刑させたバプテスマのヨハネが死人の中からよみがえったのだ、だからあのような奇跡の力がこの人を通して働いているのだ、というのです。ほかの人たちは、この方はエリヤだと言いました。ま

たほかの人たちは、預言者だと言いました。そこからヘロデは、自分が首をはねさせたバプテスマのヨハネがよみがえったのだ、と結論づけました。ヘロデは少し前に、ヨハネを捕らえさせて牢に入れていました。それはすべて、以前は異母兄弟ピリポの妻であった、自分の妻ヘロディアのためでした。ヘロデは彼女を兄弟から奪って結婚したのです。バプテスマのヨハネは、ためらうことも、王を恐れることもなく、彼に言っていました。「モーセの律法によれば、あなたが兄弟の妻を自分のものにすることは許されていません。」 ヘロディアはこの真実に耐えられませんでした。ヨハネが正しかったからです。彼女はヨハネを恨み、殺そうとしましたが、果たせませんでした。ヘロデがヨハネに深い敬意を抱いていたからです。ヘロデにとって、ヨハネは正しい聖なる人でした。彼はヨハネを保護していました。ヨハネの話を聞くと、彼はしばしば当惑しました。ヨハネが、改めるべきことを彼に告げたからです。彼は喜んで耳を傾けましたが、変わりはしませんでした。ところがある日、ヘロディアが冷酷にその機会をとらえ、ヘロデが自分で自分の手を縛ってしまい、もはやヨハネを守れなくなる日がやって来ました。ヘロデは自分の誕生日に祝宴を催しました。彼は名士たち、多くの高官や千人隊長、ガリラヤのおもだった人たちを招きました。それは、にぎやかで、酔いしれるような宴でした。そこへヘロディアの娘が入って来て、男たちの前で踊りました。彼女の踊りは、ヘロデと、食卓に着いていた人たち皆を魅了しました。ヘロデはすっかり心を奪われて、彼女に言いました。「何でも欲しいものを求めなさい。おまえにあげよう。おまえが願うなら、私の王国の半分でもあげよう。」 ヘロデは、自分が何を言っているのかわかっていませんでした。すでに飲みすぎていたのです。彼を黙認しているローマ人たちがいなければ、そのようなことは決してできなかったはずです。彼はその申し出を何度も繰り返しました。娘は、この気前のよい申し出について相談しようと、母親のところへ出て行きました。彼女は、何を願えばよいのかわかりませんでした。けれどもヘロディアは、その機会をとらえました。彼女の時が来たのです。ヨハネの首を願いなさい、と。しかも今すぐに。その首を盆に載せて持って来させなさい、と。この願いを聞いたヘロデは、深く心を痛め、うろたえました。そうです、彼は娘の願いをかなえると誓ってまでい

たのです。そして客たちが皆それを聞いてしまった今となっては、もう引き返すことはできませんでした。彼はすぐに牢へ処刑人を送り、処刑人はヨハネの首をはねました。処刑人はその首を皿に載せて娘のところに持って来て、娘はそれを母親のところに持って行きました。ヨハネの弟子たちはこのことを聞くと、その遺体を引き取って葬りました。

弟子たちが派遣を終えてイエスのもとに戻る

遣わされていた弟子たちは、派遣から戻って来て、イエスの周りに集まりました。彼らは喜びながら、注意深く耳を傾けてくださるこの方に、自分たちが行ったこと、教えたこと、そうです、体験したすべてのことを報告しました。イエスは弟子たちをご覧になり、寂しい所で少し休めるように、彼らを連れて行かれました。いつも大勢の人々が、病や問いを抱えて彼らの周りにいたからです。彼らには食事をする時間さえありませんでした。そこで彼らは舟で、自分たちだけでいられる寂しい所へ行きました。けれども人々は、彼らが舟で出て行くのを見ていて、彼らがどこへ行こうとしているのかを聞いていました。それが知れわたり、人々はすべての村から歩いてその場所へ向かい、イエスが弟子たちと一緒に着いたときには、もうそこにいたのです。

5000人の男たちと、大勢の女性や子どもたちが満腹する

彼らが舟から上がると、イエスは大勢の群衆をご覧になりました。彼らはこの方を追いかけて来たのです。**それがこの方の心を動かしました。良い羊飼いであるこの方は、深いあわれみに満たされました。** この大勢の人々が、羊飼いのいない羊のようだったからです。イスラエルが指導者も王もいなかったとき、しばしばそう呼ばれました。それからこの方は教え始められました。詳しく、かなり長く、わかりやすく、生き生きと。**いのちの言葉、大いなる知恵の言葉**を。もうかなりの時間がたったころ、その日の残りと夜のことを心配していた弟子たちが、この方のところに来ます。「ここは寂しい所ですし――だからこそ私たちはここに来たのですが――、もう遅くなりました。ここには食べる物がどこにもありません。人々を周りの農家や村に行かせて、自分で食べ物を手に入れるようにさせてください。」 けれどもイエス

は弟子たちを見つめて、驚くべきことを言われました。「**あなたがたが、あの人たちに食べる物をあげなさい**！」 驚いて、いや、戸惑って、彼らは言います。「こんなに大勢の人のために、どうやってパンを手に入れるのですか。私たちには200デナリしかなく、それでは到底足りません。」 けれどもこの方は彼らに尋ねられました。「パンはいくつありますか。行って、ここでパンをいくつ見つけられるか見て来なさい。」 彼らは戻って来ましたが、見つかったのはパン五つと魚二匹でした。そこでイエスは、大勢の人々が組に分かれて集まるように指示されました。緑の草の上に、50人ずつ、100人ずつの組になって。春のことで、草は若く青々としていました。**良い羊飼いであるこの方が、彼らを緑の牧場に導かれたのです**。それからイエスは、五つのパンと二匹の魚を取られました。この方は天を見上げ、ご自分の神であり父である方に向かわれました。食べ物のことで、この方は神に感謝し、賛美されました。それからパンを裂き、弟子たち一人ひとりが人々に配れるようにされました。二匹の干し魚も弟子たちに分け、弟子たちがそれを人々に回しました。大勢の群衆が食べましたが、不思議なことに、パンは減りませんでした。皆が満腹しました。残ったものを集めると、配ったよりもはるかに多くなりました。十二のかごが残り物でいっぱいになり、十二人の弟子たちがそれを集めたのです。そして、パンと魚で満腹したのは、女性と子どもを別にして、およそ5000人の男たちでした。**それは、イエスのうちに始まり、いつの日か全地にとって現実となる新しい創造のしるしでした**。そのとき、もはやだれも飢える必要はなく、すべての人が満ち足りるのです。イエスは、まことの王、まことの羊飼いとして民を養われます。宮殿の中で、人々から隔絶されて、自分のためにありあまるほどの宴を開いていたヘロデとは対照的です。イエスは、新しい、より偉大なモーセです。群衆を秩序正しく座らせ、荒野のような寂しい所で彼らにパンを与えられる方です。

ここで大きな奇跡が起こっていることに、人々が気づいたかどうかはわかりません。イエスは人々に、豊かな教えと、ありあまるほどの食べ物を与えられます。イエスが、死と復活の後に天に昇られ、ここ湖のほとりでのように、使命がすべての弟子たちに託される時が来るのです。「**あなたがたの番です！ あなたがたがしなければなりません！ わたしの権威と力によっ**

て。」 困難が何であれ、その解決にどれほど時間がかかっても、奇跡があってもなくても、**あきらめないでください**。嘆いてばかりいて人々を追い返すのは、イエスの弟子にふさわしくありません。あらゆる可能性を尽くし、私たちが信仰によって思い切って行動するとき、この方はそこにいて、働いてくださいます。

向こう岸への船出――イエスが湖の上を歩かれる

そしてすぐに、イエスは弟子たちに、舟に乗って湖を渡り、先にベツサイダへ行くように命じられます。この方ご自身は、人々を帰そうとされたのです。人々を帰してしまうと、この方は祈るために山に登られました。**ただ一人で**。この方にとって、それはいのちに欠かせないことでした。神との交わりと出会いです。この方の祈りには、湖の上にいる弟子たちのことも含まれていました。夕方になったとき、弟子たちは湖の真ん中におり、この方は陸におられました。そしてイエスは、彼らが懸命に漕いでいるのに、向かい風でほとんど進めずにいるのをご覧になりました。私たちも時々、そのような状況に置かれます。何ひとつ前に進まない状況です。夜も更けて、夜明け前になっても、彼らはまだ湖の上にいました。そのとき、イエスが彼らのところに来られました。この方は、まるで固い地面の上のように湖の上を歩いておられました。この方は、彼らのそばを通り過ぎようとしておられるように見えました。モーセのそばを通り過ぎた神の顕現のように。そうです、それは神の顕現でした！ 山の上ではなく、イスラエル人が恐れていた海の上でです。イエスは、ただ弟子たちを驚かせようとされたのではなく、神がそこにおられることを示そうとされたのです。肉体をとって、人間として。「**わたしはここにいる！**」 あなたがたのために！ 彼らはこの方を見て、幽霊だと思いました。彼らはひどくおびえて、恐ろしさのあまり叫び声を上げました。けれどもこの方は彼らのところに来て言われました。「驚くことはない。わたしだ。」 「**わたしはある」という方、ヤハウェご自身です**。「恐れることはない。」 この方が舟に乗り込まれると、向かい風は吹き払われたかのようにやみました。弟子たちはすっかり驚き恐れ、動揺しました。彼らは非常に驚きました。ほんの数時間前に、何千人もの人々が五つのパンと二匹

の魚で満腹したのですから、本来なら、イエスには何でもおできになると信じていてよかったはずです。彼らの心はまだ閉ざされていました。この方にいちばん近い彼らでさえ、この方が本当はどなたなのか、まだわかっていなかったのです。彼らとイスラエルが待ち望んでいたメシアであるこの方は、まさにメシアにできるはずのことをしておられました。メシアは、すべてのものを支配する力を持ちながら、同時に私たちと同じ人間であるはずでした。疲れ、神に頼り、最後には死ぬことさえある人間です。その時が来て、この方がそこにおられる今、彼らはそれをつかむことができませんでした。マルコがこれほど多くのことをこの方について伝えてくれた後で、私たちはどうでしょうか。**同じこの方が、今日、私たちの主なのです。** この方はご自分の弟子たちを見守っておられます。夜、山の上から彼らを見ておられ、そして助けるために来られたのです。

何千人もの病人が癒やされる

それから彼らは、ベツサイダではなくゲネサレに着き、そこに舟をつけました。彼らが舟から降りると、人々は彼らに気づきました。それが再び野火のように広まりました。病人たちはみな、寝床や敷物に乗せられてイエスのもとに運ばれて来ました。あらゆる所から人々は病人を連れて来ました。そしてイエスが行かれる所ではどこでも、町でも村でも農家でも、広場に病人たちが運び出されました。そして人々は、病人たちが癒やされるために、せめてこの方の衣の房にでも触れさせてほしいと願いました。そして**この方に触れた人たちは皆、たちまち健やかになりました。**後ろからイエスに触れて、たちまち癒やされた、あの長血の女のように。

これらの出来事の中で、何があなたに語りかけ、何があなたの心に触れるでしょうか。

あなたにとって新しいことは何でしょうか。

何かを学びましたか。もしかすると、自分の生活の中で実行したいと思うことも学んだでしょうか。

あなたは何のために祈りますか。ここでイエスについて読んだことを通して、イエスを礼拝してください！

疑問がありますか。書き留めてください！

7章

人の戒めと神の戒め

イエスはガリラヤにおられました。そこでこの方は、ほかのどの地方よりも多く働かれました。この方の登場、その言葉と行いは国中に知れわたり、エルサレムでも知られていました。そこで、エルサレムから何人かのパリサイ人と律法学者たちが、国の北のほうの様子を確かめようと出かけて来ました。彼らは、イエスの弟子たちの何人かが、手を洗わずに食事を始めるのを見ました。彼らの目には、そして彼らの言い伝えによれば、洗いきよめないままでは、弟子たちは祭儀的に汚れていました。パリサイ人もユダヤ人もみな、食事の前に、少なくとも一握りの水で手を洗うからです。こうして彼らは先祖たちの言い伝えを守っています。市場から帰って来て食事をするときも同じです。彼らは、水差しや杯、銅の器、寝台や座布団についても、そうした洗いやきよめをたくさん行っています。そこで律法学者とパリサイ人たちは、この方に尋ねました。「なぜ、あなたの弟子たちは昔の人たちの言い伝えと定めを守らず、汚れた手で食事をするのですか。」 イエスは彼らに答えられました。「イザヤは、あなたがたについて、なんと的確に預言したことでしょう。イザヤ書29章で読めるとおりです。**『この民は唇で、むなしい言葉でわたしを敬うだけだ。その心はわたしから遠く離れていて、本当はわたしに関心がない。』**

「彼らは神の戒めを捨てて、その代わりに人間の言い伝えを守っています。あなたがたは、神の戒めをうまくかわして無効にし、その代わりに自分たちの戒めや規則を打ち立てるほど、抜け目がないのです。モーセは言いました。『あなたの父と母を敬え』と。また、『父や母をののしる者は死ななければならない』と。ところが、あなたがたは何をしていますか。年老いた両親が必要としているもの、あなたがたが彼らに与えるべきものを、宮へのささげ物だと言うのです。両親は必要なものを受け取れません。こうしてあなたがたは、神の良い戒めを無効にし、それを自分たちの規則で置き換えている

のです。このような陰険なやり方なら、ほかにもまだ数え上げることができます。」 それからこの方は群衆のほうを向いて言われました。「よく注意してわたしの言うことを聞き、悟りなさい。外から人に入って、人を汚すことのできるものは何もありません。それは心に入るのではなく、腹に入り、そこからまた外に出されるのです。」 それからこの方は群衆から離れ、ある家に入られました。そこで弟子たちは、この方が言われたことについて尋ねました。この方は言われました。「あなたがたまで、そんなに悟りがないのですか。外から人に入るものはみな、人を汚すことができないということが、わからないのですか。それは腹に入り、そこから外に出されるのです。**むしろ、人から出て来るもの、それが人を汚すのです。** なぜなら、**人の内側から、その心から、悪い考えや企てが出て来るからです。淫らな行い、盗み、殺人、姦淫、貪欲、悪行、欺き、放蕩、ねたみの目、中傷、高慢、愚かさ、そのほかいろいろなものです。これらの悪はみな、人間自身から、その内側から出て来ます。それが人を汚すのであって、洗っていない手ではありません。**」 人は、自分の思いの世界や感情を写した写真を、すべての人に見せる気になるでしょうか。そこには何が写っているでしょうか。おそらく、イエスがここで数え上げておられることも写っているでしょう。そんなものは自分の心にはない、と言える人はだれもいません。祭儀的な、外面的な汚れによって、神の前に汚れている人はだれもいません。異邦人も、ユダヤ人ではなく異邦人だからといって汚れているのではありません。すべての人が心に罪を持っています。ユダヤ人も異邦人も汚れていて、唯一の聖なる方であるイエスによるきよめを必要としています。そのことを、イエスは次の出来事でも示されます。ユダヤ人にとって、異邦人はそれだけで汚れた者でした。けれどもイエスはそうはご覧にならず、ご自分の行いによってそれを証明されます。**イエスとともに、新しい時代が始まっていたのです。**

ユダヤ人でない女の娘が癒やされる

そこから、この方と弟子たちはツロの地方へ行きました。そこでこの方は、ご自分がそこにいることをだれにも知られないように、身を隠そうとしてある家に入られました。けれども、いつものように、それはうまくいきません

でした。この方のことを聞くとすぐに、一人の女がやって来て、この方の足もとにひれ伏しました。彼女の幼い娘は汚れた霊、悪霊につかれていました。彼女はギリシア人で、生まれはシリア・フェニキア人でした。彼女は、娘から悪霊を追い出してくださいと、この方に懇願しました。けれどもこの方は彼女に言われました。「まず子どもたちを満腹にさせなければなりません。子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのは良くないことです。」 イエスがユダヤ人のために彼らのメシアとして来られたのだから、彼女はイエスの言われたことを理解しました。それで彼女は、イエスに感銘を与えることを言いました。「でも、食卓の下の小犬も、子どもたちのパンくずはいただきます。」 「**あなたがそう言い、パンくずで満足するのだから、あなたはパンを受け取ります**。あなたの娘のところに帰りなさい。悪霊は出て行きました。」 そこで彼女は急いで家に帰りましたが、失望することはありませんでした。子どもは静かに寝床に横たわっていて、悪霊は本当に出て行っていたのです。

耳が聞こえず口のきけない人が再び聞こえるようになり、はっきり話せるようになる

それからこの方はツロを去り、シドンを通って、再びゲネサレ湖へ、デカポリス地方のただ中に来られました。そこでこの方は、多くの悪霊に縛られていた、あの悪霊につかれた人を癒やされたのでした。そこへ人々は、耳が聞こえず、話すことがとても難しく、ほとんど聞き取れない人を、この方のもとに連れて来ます。彼らは、その人に手を置いて癒やしてくださるように、この方に願います。そこでイエスは、群衆から少し離れた所へ、その人を連れ出されました。そしてその人の両耳に指を入れ、ご自分のつばを指につけて、その人の舌にさわられました。**それから天を、ご自分の神であり父である方を見上げ、深く息をついて言われました。「エパタ！」** これは「開け」という意味です。たちまち彼の耳が開き、舌を縛っていたもつれが解けました。彼ははっきりと話せるようになりました。イエスは人々に、このことを言い広めないように命じられました。けれども、いつものように、この方が口止めをされればされるほど、人々はますますこの方の奇跡を言い広めまし

た。この癒やしの奇跡に、人々はすっかり我を忘れました。彼らはこんなことを一度も体験したことがなく、望むことさえできなかったのです。異邦人である彼らは言いました。「**この方のなさったことは、みなすばらしい**。耳の聞こえない人を聞こえるようにし、口のきけない人を再び話せるようにしてくださる。」

これらの出来事の中で、何があなたに語りかけ、何があなたの心に触れるでしょうか。

あなたにとって新しいことは何でしょうか。

何かを学びましたか。自分の生活の中で実行したいと思うことを。

あなたは何のために祈りますか。ここでイエスについて読んだことを通して、イエスを礼拝してください！

疑問がありますか。何か理解できなかったことがありますか。書き留めてください！

8章

4000人が満腹する

またしても、大勢の人々がイエスのもとにいました。彼らは異邦人の地域にいました。そしてまたしても、食べる物が何もありませんでした。そこでこの方は弟子たちを呼び寄せて言われました。「**わたしは、この人たち皆がかわいそうです**。わたしのために、もう三日もここにいて、食べる物がないのです。今、空腹のまま家に帰らせたら、途中で倒れてしまうでしょう。中には遠くから来ている人もいます。」 弟子たちは答えました。「こんな荒野で、どこからそんなにたくさんのパンを手に入れることができるでしょうか。」 イエスは尋ねられました。「パンはいくつありますか。」 「七つです」と彼らは言いましたが、5000人の給食のときの同じ言葉を思い出してもよかったはずです。それからこの方は、人々を座らせるように命じられます。この方は七つのパンを取り、感謝の祈りをささげてパンを裂き、弟子たちに与えられました。弟子たちも同じようにして、人々に配りました。小さな干し魚も少しありました。この方はそれについても感謝して、配られました。**皆が満腹しました**。 余ったパンを集めると、なんと七つのかごになりました。イエスに**心もからだも**満たされて家に帰されたのは、4000人でした。あの女は先に、食卓の下に落ちるパンくずで小犬も満腹する、と言っていたのではなかったでしょうか。ここでイエスは、いのちの言葉と食べるパンとで、多くのユダヤ人でない人々を満腹させられたのです。この方ご自身は、弟子たちと一緒に再び舟に乗り、彼らはダルマヌタへ渡りました。

天からのしるしを見せてほしい！

そこへパリサイ人たちが集まって来て、イエスに議論をふっかけました。彼らは、サタンのように、天からのしるしをこの方に求めて、この方を試し、試みようとしたのです。この方がメシアであることを証明させるためです。この方によってイスラエルが解放される、というしるしです。けれどもイエスは、批判と不信仰があまりにも大きいので、心の中で深くため息をつかれ

ました。「なぜこの人たちはしるしを求めるのか。わたしを通して、すでにたくさんのしるしが起こっている。いや、一つ確かなことがある。この人たちは、自分たちの望むようなしるしを決して受けることはない。わたしは、彼らがしるしを受けることを許さない。彼らはまた、自分たちが思い描いているようなメシアを受けることもない。信仰なしには。」 この方は彼らを置き去りにして、弟子たちと一緒に再び舟に乗り、湖の向こう岸へ渡られました。

弟子たちはしるしを体験しながらも、信頼していない

弟子たちはパンを持って来るのを忘れていました。一つしか持っていなかったのです。もしかすると、それは比喩的な意味でイエスご自身だったのかもしれません。舟の中でイエスは弟子たちに言われました。「パリサイ人のパン種に気をつけなさい。彼らの偽善と、人間の戒めと、天からのしるしを求めるという彼らの不信仰に。ヘロデのパン種にも気をつけなさい。彼の暴政と見栄っ張りと、そうです、神をないがしろにすることに。この種のパン種が、あなたがたの心にしみ込んで、それを損なうことのないようにしなさい。」

弟子たちは、パン種という言葉を聞くと、すぐに自分たちがパンを忘れてきたことを考え、この方がそのことを指摘しようとしているのだと思いました。イエスは信じられない思いでした。「なぜ、忘れてきたパンのことを考えるのか。パンを見るのではなく、ただわたしだけを見なさい。まだわからないのか。どうして悟らないのか。あなたがたの心は、まだ閉ざされたままなのか。イザヤはそれを民について言ったが（マルコ4:12）、あなたがたもそうなのか。目があっても見ないのか。耳があっても聞かないのか。たった五つのパンで5000人が満腹したときのことさえ、思い出せないのか。食事の後、あなたがたはかごいくつを拾い集めたか。」 彼らは言いました。「十二です。」 「少し前に、七つのパンが4000人を満腹させたとき、かごいくつが余ったか。」 「七つです」と彼らは言いました。するとこの方は言われました。「まだ悟らないのか。私たちはたった13人なのに、パンが一つしかないからといって不安になっているのか。その小さな信仰で、あなたがたはわ

たしに何ということをするのか。しかし、あなたがたは見て、聞いて、学んでいく。わたしはあきらめないし、あなたがたを見捨てない。」 今日に至るまで、この方はご自分の弟子たちを決して見捨てられません。

盲人の癒やし

それから彼らはベツサイダに着きます。そこで人々は、一人の盲人をこの方のもとに連れて来て、彼に触れて見えるようにしてくださいと願います。この方は彼の手を取って、村の外へ連れ出されました。そこでこの方は彼の両目につばをつけ、彼の上に手を置いてから尋ねられました。「何が見えますか。」 この人は初めて何かを見ましたが、まだぼんやりとしていました。「人が見えます。木のようですが、歩いているのが見えます。」 それからイエスは、もう一度彼の両目に手を当てられました。その人が見回すと、今度は健やかな目で見るように、はっきりと見えました。

それからイエスは、村に入って何もかも言い広めたりせず、まっすぐ家に帰るように彼に命じられました。それは弟子たちへの教訓でした。彼らはしるしを見てはいましたが、まだぼんやりとしか見ていませんでした。彼らは、この方がだれであるかを認めていませんでした。彼らもまた、すっかりはっきり見るためには、二度目のタッチを必要としていました。それは、イエスがよみがえられたときに来ることになっていました。

ペテロが「あなたはキリストです！」と言ったとき

それからイエスは弟子たちと一緒に、さらに北のピリポ・カイサリアへ向かわれました。そこには偶像の神殿がたくさんありました。そして、冥界への門と呼ばれたヨルダン川の水源がありました。こうして長い道のりを歩いているあいだ、話をする時間がありました。イエスは弟子たちに尋ねられました。「人々は、わたしのところで体験したことすべてを踏まえて、わたしをだれだと言っていますか。」 弟子たちはいろいろ耳にしていたので、この方に言いました。「バプテスマのヨハネです。エリヤだと言う人たちも、預言者の一人だと言う人たちもいます。」 数分後、イエスは弟子たちに尋ねられました。「わたしをよく知っているあなたがたは、わたしをだれだと信じま

すか。」 弟子たちの代弁者であるペテロが、ずばりと言いました。「**あなたは油注がれた方です。メシアです。キリストです。**」 イスラエルが待ち望んでいる方です。イスラエルを解放する方です。この方は弟子たちに、そのことをだれにも言わないように強く、いや、厳しく命じられました。その時はまだ来ていませんでした。**この方は、彼らが思い描いていたようなメシアではありませんでした。何か別のこと、彼らが期待していたのとは違うことが起こるはずでした。**

最初の死の予告

ペテロが――ほかのすべての弟子たちを代表しても――このまことの言葉を口にした後、イエスは彼らに、三度のうちの最初として、まったく率直に、詳しく言われました。「人の子、それはわたしのことです。わたしは多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられなければなりません。**わたしは殺されます。しかし、三日の後によみがえります。そうなるのであり、そうでなければならないのです。わたしにはほかの道はありません。**」

ペテロにとって、イエスはメシアでした。彼はこの方をわきへ連れて行き、思いとどまらせようとしました。彼の理解では、そのようなことは決して起こりえず、起こってはならないことでした。彼は神のご計画を知りませんでした。この瞬間のペテロにとって、十字架は愚かなことであり、神の知恵でも、救いをもたらす神の力でもありませんでした。

イエスは、同じように考えているほかの弟子たちをご覧になりました。そしてこの方はペテロを叱りつけ、皆の前で厳しくたしなめられました。「下がれ、サタン！ あなたは、神が考えておられるように、神が望んでおられるように考えていない。あなたは、何もかも人間のように見ている。しかし、人間が考え、行うようにすることが解決なのではない。まったく別のものが必要なのだ。

「**十字架につけられ、よみがえったキリストだけが、世界の救い主となり、王となる。サタンは、わたしがまさにそのような者に、すべての人のために**

なることを阻もうとしている。神がご自分の家族を得られることを、阻もうとしているのだ。」

イエスに従うとは、この方と同じ道を歩むこと

それからこの方は、群衆を呼び寄せられました。ふだんご自分からそうされることは、めったにありませんでした。人々はいつも自分たちのほうからやって来たのです。けれども、この方が言おうとしておられることは、それほど大切でした。「わたしについて来たい者は、自分を捨てなければなりません。神に第一の場所を明け渡し、自分の人生の主導権を神に委ねなければなりません。わたしがそうするように、自分の十字架を負って、わたしについて来なさい。自分のいのちを握りしめて救おうとする者は、それを失うからです。**しかし、よく聞きなさい。わたしのため、また良い知らせ、福音のために自分のいのちを失う者は、それを永遠に救うのです。** 人は、たとえ全世界を手に入れて自分のものにしても、最後に死によって自分のいのちを失ったら、何の得があるでしょうか。何をもって、自分のいのちを買い戻せるでしょうか。地上のあらゆるものを所有していても、それには足りないのです！

「この姦淫と罪の時代の、この民の人々の前で、わたしの名と、わたしが教えたことを告白するのを恥じてはなりません。しかし、それを恥じて、そうする勇気を持たない者のことは、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに再び来るときに、恥じて、その人の側には立たないでしょう。」

これらの出来事の中で、何があなたに語りかけ、何があなたの心に触れるでしょうか。

あなたにとって新しいことは何でしょうか。

何かを学びましたか。もしかすると、自分の生活の中で実行したいと思うことも学んだでしょうか。

あなたは何のために祈りますか。ここでイエスについて読んだことを通して、イエスを礼拝してください！

疑問がありますか。それとも何か理解できなかったことがありますか。書き留めてください！

9章

ヘルモン山の上での輝く栄光

イエスは弟子たちに言われました。「ここでわたしのそばに立っている人たちの中には、神の王国が力をもって到来しているのを見るまで、決して死なない人たちがいます。」 そして六日後、三人の弟子たちにとって、その時が来ることになっていました。彼らは何も予感していませんでした。イエスは、ペテロとヤコブとヨハネを連れて、高い山、ピリポ・カイサリアの近くにあるヘルモン山に登られます。彼らはイエスと自分たちだけで山を登って来たのです。突然、この方は彼らの目の前で姿が変わりました。その衣は真っ白に輝きました。地上のどこにも見つけられないほど白く。このような白い衣をまとっていたのは、ダニエルが7章9節で語っている「年を経た方」、神ご自身だけでした。そして突然、**エリヤ**が**モーセ**とともに現れました。彼らはイエスと語り合っていました。この二人については、マラキがヘブライ語聖書の最後の最後の節、マラキ書3章1節と4章4〜6節で語っていました。エリヤが来て、すべてを回復する、と。それはイスラエルではだれもが知っていることでした。そして**弟子たちは、この二人が、近づいている終わり、さばき、そして救いのしるしに違いないと気づいたのです**。そのとき、ペテロはすっかり困惑して、一つの提案をしました。彼は、自分がなぜ、何を言っているのかわかっていませんでした。「先生、あなたがた三人のために、それぞれ幕屋を建てましょう。」 弟子たちは恐ろしさのあまり、ぼうぜんとしていました。イエスに従うことは、日々の営みから離れて山の上に住みつくことではありません。けれども日々の生活のためには、山の上での**ビジョン**が必要なのです。この出来事は予告編であって、弟子たちの日常ではありませんでした。その日常に、彼らはまもなく再び向き合うことになっていました。ペテロがそう言うと、雲が現れて彼らをおおいました。それは父なる神の臨在でした。そして雲の中から声がして、イエスがバプテスマを受けられたときにヨルダン川で一度聞かれたことを告げました。「**これは、何にも**

まさってわたしが愛する子。この子にだけ聞け。まずエリヤにではなく、モーセにでもなく、この子に聞け。」 この方の言葉こそが大切なのです！ あなたがたが見たものよりも、さらに大切なのです。**この方に聞きなさい！** そして二人の姿は消えて、ただイエスだけが見えていました。**ラビであり、メシアであり、神の子であり、神ご自身であるこの方こそが、エリヤとモーセが始め、預言していたことを完成させ、成就させるはずでした。メシアだけが、神のご計画と神の王国を力をもって打ち立てることができました。けれども、それはゴルゴタを通ってのみでした。** それは、これから来るものの予告、いわば予告編でした。政治的、軍事的な介入とは違い、神の王としての支配は、十字架、復活、昇天、そしてペンテコステの聖霊の注ぎによって、地上に打ち立てられるはずでした。それから彼らが山を下りて来るとき、イエスは、見たことをだれにも話さないようにと、彼らに強く命じられました。この方が死人の中からよみがえったとき、初めてすべてが成し遂げられ、彼らはそのことを話してよいのです。そして実際、彼らはそのときそうしました。そのときには、キリストが栄光に入る前に苦しまなければならなかったことを、彼らは理解しているはずだったからです。三人の弟子たちは、山を下りながら、死人の中からよみがえるとはどういう意味なのかを論じ合いました。それが彼らの心を大いに占めていました。彼らはヘブライ語聖書から、終わりの日のすべての人の一般的な復活しか知らなかったからです。

預言者エリヤが来ることについて

弟子たちはエリヤを見たのでした。彼らは、終わりの前にエリヤが来なければならないと言っていた律法の教師たちのことを思い出しました。そこで弟子たちはイエスに尋ねました。この方がメシアであるなら、エリヤはいつ、どこに来ていたのですか、と。この方は彼らに答えられました。「確かに、まずエリヤが来て、神の民全体を回復させます。しかし、愛するわたしの弟子たちよ、それならなぜ聖書は、人の子が多くの苦しみを受け、蔑まれると、さらに言っているのでしょうか。あなたがたに言いますが、エリヤはもう来たのです。すなわち、民を悔い改めへと招いたバプテスマのヨハネの働

きにおいてです。そして人々は、彼に好き勝手なことをしました。列王記第一19章に書かれているように、神を恐れない王妃イゼベルによってエリヤの身に起こったのと同じようにです。」 ヨハネは、神を恐れない一人の女によって命を落としました。今や、エリヤの、つまりヨハネの使命は果たされたのです。そして、ヨハネがその先駆けであったイエスも、バプテスマのヨハネと同じことを体験されるはずでした。けれども、死んでよみがえられたこの方によって、すべてのものの完全な回復がもたらされるはずでした。当時はまだ、だれもそれを理解していませんでした。かつて、出エジプト記24章と34章で、モーセが山に登り、栄光に輝く神の臨在の中に入ったように。顔を輝かせて、彼は再び民のところに下りて来ました。そのように、**イエスはまことのモーセ**であり、その言葉は律法なのです。そして父なる神は、私たちがこの方に聞くべきことを確証しておられます。イエスと弟子たちは山の上にいましたが、今また下りて来ました。日常へ、毎日の生活へと。

悪霊につかれた少年の解放

彼らがほかの弟子たちのところに戻って来ると、そこには群衆がいました。その真ん中にほかの弟子たちがいて、律法学者たちが彼らと議論していました。群衆はこの方を見ると驚き、あいさつをしました。だれもが話題にしていたこの方が、そこにおられたのです。この方は彼らに尋ねられました。「何を議論しているのですか。」 群衆の中の一人の男が、この方に言いました。「先生、私は息子をあなたのお弟子たちのところに連れて来ました。息子は口をきけなくする霊につかれていて、話すことができないのです。この悪い霊が息子をつかむと、地面に投げ倒します。すると息子は口から泡を吹き、歯ぎしりをします。それから、てんかんの発作のときのように、全身が板のようにこわばるのです。」 けれども、それは病気ではなく、悪霊に取りつかれていたのです。「私はお弟子たちに、霊を追い出してくださいと言いました。でも、彼らには力が足りませんでした。私は戸惑いました。お弟子たちは無力のように見えたのです。」 そこでイエスは、皆に聞こえるように、まるで群衆とご自分の弟子たちとを区別していないかのように言われました。「**神に何も期待しない、なんと不信仰な時代でしょう**！ いつまで、わ

たしはこれを我慢しなければならないのでしょう。その子をわたしのところに連れて来なさい！」 そこで人々は少年をこの方のところに連れて来ました。悪い霊は、自分を呼び寄せているのがイエスだとわかるとすぐに、身をよじって暴れ、必死に自分の力を見せつけようとしました。霊は少年をつかんで、地面に投げ倒し、口から泡を吹かせたのです。これをご覧になったイエスは、父親に尋ねられました。「この子がこうなってから、どのくらいになりますか。」 「幼い時からです」と父親は言いました。「そして霊は、この子を殺そうとして、何度も火の中や水の中に投げ込もうとしました。お願いです。もしおできになるなら、私たちを助けてください。私たちをあわれんでください。」

イエスは答えられました。「**『もしできるなら』と言うのか。それはどういうことですか。** 神を信じる者には、どんなことでもできるのです！」 すると父親は叫びました。「**信じています――でも、できないのです。どうか、すっかり信頼できるように助けてください！**」 信仰と不信仰が入り混じった状態で、信じたり疑ったりしながら、彼はイエスの前に立っています。困難な状況にある私たちと同じように。イエスは、ますます多くの人々が集まって来るのに気づかれました。そこでこの方は、悪い汚れた霊を叱りつけ、こう言われました。「耳を聞こえなくし、口をきけなくする霊よ、この子から出て行け。二度とこの子に戻って来るな。」 すると霊は突然叫び声を上げ、少年をあちこちに引きずり回しました。強い方であるイエスは、もう一度姿を現したこの霊を屈服させられました。逃げ出さなければならなくなる前の、最後の一回でした。霊が去ると、少年は死んだようになりました。それを見ていた人々は皆、そう思いました。けれどもイエスは彼の手を取って起こされ、少年は立ち上がりました。すっかり普通に戻り、この苦しめる霊から解放されて、イエスによっていのちへと連れ戻されたのです。この方ご自身が死人の中からよみがえるということについての、すべての人への教訓でした。

それからこの方は、弟子たちと一緒にある家に入られました。弟子たちは確かにイエスから悪霊に対する権威を受けていたので、これはいったいどういうことなのかと不思議に思っていました。自分たちだけになったとき、彼ら

はこの方に尋ねました。「なぜ、私たちは霊を追い出せなかったのですか。」 イエスは彼らに答えられました。「この種の霊は、あなたがたには、特別に深い祈りによってでなければ追い出せません。霊にもいろいろあって、この霊は特に強いのです。あなたがたは忙しすぎて、祈る時間がなかったのですか。大切なのは、あなたがたの言葉や技術ではなく、わたしとの関係です。祈りの訓練と信仰こそが決め手です。自分自身や自分の経験に頼ることのないように気をつけなさい。**神の力を何度でも新たに受けるために、あなたがたはいつも新たに神に信頼しなければなりません**。」

最初のころより難しい課題が、弟子たちを待ち受けているようです。そもそも、イエスに従う道は、今やより険しいものになっていきました。この方はエルサレムに行こうとしておられたからです。この方は弟子たちに、ご自分の最期を説明しようとされました。信仰はますます多くを求められ、それによって育てられていきます。信仰の歩みの初めに最大の信仰が求められるのではなく、絶えず新しい、しばしばより大きな課題によって、少しずつ強められていくのです。私たちが思い切って、すっかり神により頼むときに。

苦しみについての二度目の予告

それから彼らはそこを去り、ガリラヤを通って行きました。イエスは、それをだれにも知られたくないと思っておられました。道々、この方は弟子たちに教え、はっきりと告げられました。「**人の子は、なすすべもなく人々の手に引き渡されます**。 彼らは人の子を殺します。そして人の子は、それに抵抗しません。しかし三日の後に、死人の中からよみがえります。」 今回、それはたとえではなく、文字どおりの、実際に起ころうとしている出来事でした。弟子たちには、それがわかりませんでした。だれがこの方を引き渡すというのでしょうか。それは彼らにとってなじみのないことで、彼らはこの方に尋ねる勇気もありませんでした。もしかすると、ペテロのように叱責されるのを恐れたのかもしれません。

だれがいちばん偉いのか

それから彼らはカペナウムに着きました。家の中で、この方は弟子たちに尋ねられました。「道々、何を言い争っていたのですか。」 この方はご存じでした。恥ずかしくて、だれも何も言いませんでした。それがイエスのお気に召さないだろうと、彼らは感じていたのです。彼らは、十二人のうちでだれがいちばん偉く、いちばん重要なのか、あるいは自分たちの主人であるメシアの国でまもなくそうなるのかを、言い争っていたからです。そこでイエスは腰を下ろし、十二人を呼び寄せて言われました。「あなたがたのうちで先頭に立ちたいと思う人は、最後の者にならなければなりません。皆に仕える者に。」 **イエスは、ありふれた人間の考え方をひっくり返されます。そしてこの方ご自身が、その最大の模範なのです。** それを目に見える形で示すために、この方は一人の子どもを呼び寄せ、彼らの真ん中に立たせて、その子を腕に抱かれました。当時、子どもには名誉も地位もなく、権利もわずかで、だれからも顧みられませんでした。この方は言われました。「わたしの名のゆえに、このような子どもの一人を受け入れる人は、わたしを受け入れるのです。そしてわたしを受け入れる人は、同時に、わたしを遣わされた方、わたしの父を受け入れるのです。」 子どもを受け入れるときには、身をかがめ、いちばん下まで降りて、自分を小さくしなければなりません。蔑まれたしもべであるイエスを受け入れるなら、自分自身を小さくし、すっかり神に身を投げかけなければなりません。そして、この方のようになるのです。

私たちに反対しない者は、私たちの味方です

ヨハネがイエスに言いました。「先生、あなたの名によって悪霊を追い出している人を見ました。でも、その人は私たちの仲間ではなく、私たちについて来てもいませんでした。それで、私たちはそれをやめさせようとしました。」 けれどもイエスは答えられました。「やめさせてはいけません！ わたしの名によって力あるわざを行う人が、すぐに私たちの悪口を言うことはありません。私たちに反対しない人は、私たちの味方です！ **自分たちがいちばん重要だとか、いちばん強いなどと思ってはなりません。**あなたがたが助けることのできなかった、あの少年のことを思い出しなさい。今、あなたがた

は悪霊を追い出している人を妨げています。」 かつてヨシュアがモーセに、御霊によって預言していた二人の男をやめさせてください、と言ったことがありました。けれどもモーセは、民数記11章26〜29節で、少しの人ではなく、すべての人が預言するようになればよいのに、と言いました。「あなたがたがわたしに属しているからという理由で、あなたがたに一杯の水を飲ませてくれる人は、必ずその報いを受けます。わたしがそうするのです。名も知られず、目立たない人たちが大勢いるでしょう。わたしの名によって一杯の水を差し出すことによってのみ、目に留まる人たちです。そしてあなたがたは、一杯の水がその瞬間に最も尊いものとなるような迫害の状況に置かれるでしょう。そのとき、あなたがたこそが、人が身をかがめて手を差し伸べる小さな者たちなのです。」

罪へと誘うことと、その結果

「そして、これらの小さな、取るに足りない人たちの一人に、信仰のつまずきとなる罠を仕掛け、罪へと誘う者は、むしろ大きな石臼を首にかけられて、海に投げ込まれたほうがよいのです。」 イエスにとって、罪へと誘うことはそれほど重大なことなのです。

イエスに従うことは、戦いの中にいることを意味します。誘惑と抵抗が、いたる所で待ち伏せしています。 悪の力は、すべての弟子の生活の中でも働いています。問題は自己実現ではなく、悪が誘い、私たちのうちで息を吹き返すときに、はっきりとした態度をとることです。いちばん先に立とうとする願いは、そのような悪い誘惑でした。**従うことと十字架の道においては、犠牲と自分を明け渡すことが求められているのです。**だからイエスは、ぞっとするようなことを言われます。文字どおりの意味ではありませんが、だからといって、それほど真剣でないわけではありません。「もしあなたの手が、あなたにとって信仰のつまずきの罠となり、あなたを罪に誘うなら、それを切り落としなさい！ 両手がそろったまま地獄に、消えることのない火の中に行くよりは、体の一部を失ってでも永遠のいのちに入るほうが、あなたにとって良いのです。もしあなたの足が、あなたにとって信仰のつまずきの罠となり、あなたを罪に誘うなら、それを切り落としなさい！ 両足がそろったま

ま地獄に、消えることのない火の中に行くよりは、体の一部を失ってでも永遠のいのちに入るほうが、あなたにとって良いのです。あなたの目があなたを罪に誘うなら、それをえぐり出しなさい！ 両目がそろったまま地獄に投げ込まれるよりは、片目だけで神の新しい世界、神の永遠の王としての支配の中に入るほうが、あなたにとって良いのです。そこでは、うじ虫は死なず、火は消えることがありません。」 手と足と目とは、罪に誘われ、罪に向かって行動しうる人間全体を指しています。永遠のいのちは、一時的な罪の楽しみよりも、はるかに大切なのです。**イエスのこの呼びかけは、地獄そのものと同じように、罪と罪への誘惑とをどれほど真剣に受け止めなければならないかを示す、強烈な絵なのです。** 地獄、ゲヘナは、実在の場所でした。エルサレムの南の端にあるヒンノムの谷です。いつも火が燃えているごみ捨て場で、死体を含む廃棄物のために、うじ虫が絶えず新しい餌を見つけていました。イスラエルの歴史の中で、忌まわしい偶像礼拝と子どものいけにえに結びついていたこの場所を、イエスは、正しくない人々、贖われていない人々の行く場所の典型として用いておられます。イエスの時代のユダヤ人たちも、そのように考えていました。ですから、この方は何も新しいことを言われたわけではないのです。

弟子たちの生活における塩についての三つの厳粛な言葉

「人はみな、火によって塩味をつけられ、きよめられます。」 そのように、弟子たちと教会全体は、迫害の火によってきよめられるのです。当時、いけにえが塩によってきよめられたのと同じように。「塩は良いものです。しかし、塩が力を失い、効き目がなくなったら、何によってその効き目を出し、取り戻すことができるでしょうか。わたしの言うことを行い、わたしが話し、行ったように話し、行うことによって、地の塩でありなさい。互いに平和に暮らすことによって、あなたがたのあいだに塩の力強い働きを持ちなさい。」 平和の君に従うなら、その方の平和があなたがたを治めるはずです。平和な交わりの中で生きなさい。少し前まであなたがたについて来ようとしなかった人たちとも、食卓をともにしなさい。名誉のない小さな人たちと

も。そこで自分たちの地位をめぐって争うのは、やめなさい。あなたがたは皆、兄弟姉妹なのです。

これらの出来事の中で、何があなたに語りかけ、何があなたの心に触れるでしょうか。

あなたにとって新しいことは何でしょうか。

自分の生活の中で実行したいと思うことを、何か学びましたか。

あなたは何のために祈りますか。ここでイエスについて読んだことを通して、イエスを礼拝してください！

イエスについて、何を学びますか。

10章

ユダヤへ向かう途上のイエス

それから彼らは出発して、ユダヤの地方に来ました。そしてヨルダンの川向こうでも、また大勢の人々がこの方のもとにやって来ました。いつものように、この方はその機会を用いて彼らを教えられました。彼らがこの方に耳を傾けていたからです。

パリサイ人たちが離婚の問いでイエスを試す

群衆のいる所に、イエスはおられました。パリサイ人たちにとっては、皆の前でこの方に挑む良い機会です。彼らは、この方を間違った答え、少なくとも疑わしい答えへと誘い込もうとして尋ねました。「夫が妻を離縁することは許されていますか。」 当時、律法学者たちのあいだでは、モーセをどう理解すべきかについて、さまざまな意見がありました。夫に妻を離縁する権利を与えるのは、姦淫だけなのか、それともどんな理由でもよいのか。パリサイ人たちにとっては、それほど重大でない理由でも妻を去らせることができるほうが、都合がよかったのです。ただし、離縁状を書いてです。イエスは、汚れに関しては人の内側のほうがはるかに大切なのだから、手を洗うことは重要ではない、と言われたのでした。この問いに、この方は何と答えるでしょうか。

イエスは、離婚に対する彼らのまったく間違った態度を見抜き、問い返すことによってそれを明らかにされます。「モーセは、それについて何と言いましたか。」 彼らは言いました。「モーセは、離縁状を書いて妻を去らせることを許しました。」 けれどもイエスは彼らに言われました。「モーセがそうしたのは、あなたがたが、神と神の良い秩序に対して心をかたくなにしたからにすぎません。あなたがたは、自分のしたいことをするために、何が許されるかだけを問うています。ただ追い出された妻が、子どもたちを抱えてどうなるのかを問いません。あなたがたは、まだどうにか許されることは何か

ではなく、神が何を望んでおられるのかを問うべきです。神が男と女を創造されたとき、初めからそうではなかったからです。男は父と母を離れ、妻と結ばれて、魂においてもからだにおいても、堅く新しい一体となるのです。もはや二人ではなく、一つであるほどの一体です。神がこのように結び合わせたものを、人が引き裂いてはなりません。」 それもまた、モーセが創世記で語っていたことであり、結婚についての神の意図にかなうことでした。妻の離縁についてのモーセの戒めは、妻を守り、そうした別離のひどい結果をできるだけ小さくするためのものでした。追い出された妻は、無力で無防備でした。モーセは、離婚や離縁を良いものにしたのではありません。主は、ヘブライ語聖書の最後の書、マラキ書2章16節ではっきりと言われました。「**わたしは離婚を憎む**！」 パリサイ人たちは聖書を誤解し、結婚についての神の良いみこころを認めていなかったのです。そして、いつものように、家の中で自分たちだけになったとき、弟子たちは離婚についてこの方に尋ねました。この方は彼らに言われました。「妻を離縁して別の女と結婚する者は、妻に対して姦淫を犯すのです。妻が夫を離縁して別の男と結婚する場合も、まったく同じです。それは夫に対する姦淫です。」

イエスは、パリサイ人たちが聖書にかなうと考えていたことに反論されます。弟子たちは驚きました。けれどもイエスは、神の国における神の支配がどのようなものかを、はっきりと示されます。そこで通用するのは神の戒め、神の創造の秩序であり、それはいつも祝福となるのです。問題は、モーセが何を許したかではなく、神のみこころが何であるかなのです。

イエスと子どもたち

女性や子どもたちは、この男性中心の社会では発言権がなかったので、しばしば虐げられ、暴力を受けていました。離婚の問題についてイエスが女性をかばい、身勝手から守られたのと同じように、この方は今度は子どもたちに目を向けられます。母親たちが、この方にさわっていただこうと、子どもたちを連れて来たからです。ところが弟子たちは、そんなことはやめなさいと、彼女たちを叱りつけました。ついさっきイエスは彼らに、偉そうにふるまう彼らが**子どもから何を学ぶべきか**について、教えを与えられたばかりで

した。イエスは、弟子たちのふるまいをよくご覧になっていました。そして、それがまったくお気に召しませんでした。この方は彼らに言われました。「**子どもたちを皆、わたしのところに来させなさい。決して邪魔してはいけません**！ まことに、あなたがたに言います。自分を小さくして、子どものように神の王国を受け入れる者でなければ、決してそこに入ることはできません。」 そしてこの方は子どもたちをしっかりと抱き寄せ、手を置いて祝福されました。

金持ちと永遠のいのち

彼らが再び出て行って道を進んでいると、一人の人がやって来て、ほこりっぽい道の上でこの方の前にひざまずき、切実な問いを投げかけました。「良い先生、**永遠のいのちを受けるためには、何をしなければならないでしょうか**。」 「なぜ、わたしを良いと言うのですか。良い方はただひとり、神だけです！ 戒めはあなたも知っているはずです。殺してはならない、姦淫してはならない、盗んではならない、偽りの証言をしてはならない、そして父と母を敬え。」 すると彼は言いました。「先生、私は若いころから、それらすべてを守ってきました。」 イエスは、彼がそうして自分の前にいるのをご覧になり、彼の言うことを聞いて、彼をいつくしまれました。けれども、彼には決定的なものが一つ欠けていました。イエスは彼の心の中をご覧になったからです。この方は彼に言われました。「**永遠のいのちを持つために、あなたには一つ欠けているものがあります。あなたの財産をすべて売り払って、貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を持つことになります。永遠のいのちを！ そのうえで、来て、わたしについて来なさい**。」 これを聞くと、彼は悲しくなり、愕然としてイエスのもとを去って行きました。この要求は彼にとってあまりにも徹底していました。彼はたくさんの財産を持っていたからです。この財産で、永遠のいのちを買うことはできませんでした。彼は、イエスが挙げられた戒めをすべて守っていました。けれども、第一の最も大切な戒め、つまり神を愛し、神を人生の第一の場所に置くことを、彼は忘れていたのです。彼にとって、財産は神よりも大切だったのです。それからイエスは、それを見ていた弟子たちを見回して言われました。

「富や財産を持っている者が神の国に入るのは、なんと難しいことでしょう。」 弟子たちはこの言葉に驚きました。神の国はすべての人に開かれているのではなかったのでしょうか。けれどもイエスはもう一度言われます。「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことでしょう。金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうがやさしいのです。」 金持ちは自分の財産に頼っていて、何ひとつ不足がなく、彼の目から見れば、神の国は彼に大したものを差し出してはくれないのです。すると弟子たちはすっかり驚いて、互いに言いました。「**それでは、いったいだれが救われることができるだろうか。**」 イエスは彼らを見つめて言われました。「人にはできないことですが、神にはそうではありません。**神にはどんなことでもできるのです。神は、どんな心でも動かして、福音を信じ、わたしについて来るようにすることがおできになるのです。**」

イエスに従うことは報われるのか

ペテロは、イエスのこの言葉に深く心を突かれました。彼ら自身は、すべてを捨ててこの方について来たのです。それで、永遠のいのちを受けるのに十分なのでしょうか。「あなたに従うためにすべてを捨てた私たちは、いったい何をいただけるのでしょうか」とペテロは尋ねます。イエスは答えられました。「わたしのため、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子ども、畑を捨てた者で、その百倍を受けない者はだれもいません。今この時に、この世の生活で、家、兄弟、姉妹、母、子ども、畑を――ただし迫害とともに――。そして、確かに、最終的に、来たるべき時代、神の新しい世界の栄光の中で、永遠のいのちを受けるのです。」 ここに、王国の「すでに――いまだ」が見て取れます。神の新しい世界の未来が、今すでに現在の時の中に働いているのです。百倍とは、今の時における物質的な利益ではなく、弟子たちの家族のような交わりとその持ち物に、豊かにあずかることです。

「しかし、先にいる多くの者が後になり、この人生で後にいる多くの者が、来たるべき永遠のいのちにおいて先になります。」 私たちがこの人生で目にしていることが、神にとっての実際の姿と一致するとは限りません。神は心

をご覧になり、ご自分がいちばん喜ばれるもの、つまりこの人生において何事にも神を優先したことを、重んじてくださいます。

イエスは三度目にご自分の死について語られる

彼ら、すなわちイエスと十二人、そしてイエスに従うほかの女性たちや男性たちは、ヨルダンの谷からエルサレムへと上る途上にありました。イエスはただお一人で、彼らの先頭を歩いておられました。この方が先に立って歩いて行かれるのを見て、彼らは驚き恐れました。この方の様子が、彼らを不安にさせたのです。何かがおかしい。いつもとまったく違っていました。それからこの方は十二人をそばに呼び、エルサレムでご自分の身に起ころうとしていることを話されました。「人の子は、祭司長たちと律法学者たちに引き渡されます。彼らは人の子を死刑に定め、異邦人に引き渡します。彼らは人の子をあざけり、つばをかけ、むちで打ち、殺します。しかし三日の後に、人の子はよみがえります。」

王国での最上の席をめぐる争い

そこへ、ゼベダイの子である二人の兄弟ヤコブとヨハネが、問題のある願いを抱えてイエスのところにやって来ます。「先生、お願いがあります。どうか、それをかなえてください。」 イエスは尋ねられます。「何をしてほしいのですか。」 「あなたの栄光の王国が始まるとき、私たちがあなたの右と左に座れるようにしてください。」 イエスは彼らに答えられました。「あなたがたは、自分が何を願っているのか、わかっていません。わたしが飲もうとしている杯を飲むことができますか。あるいは、わたしが受けようとしているバプテスマを受けることができますか。」 この勝利の栄誉の席に着くためには、この苦しみの杯を飲み、この恐ろしい苦しみのバプテスマを体験しなければならないのです。あまり考えもせずに、彼らは言いました。「できます。」 イエスはさらに彼らに言われます。「わたしが飲む杯を、あなたがたは飲むことになります。わたしが耐え忍ぶ苦しみのバプテスマを、あなたがたも受けることになります。しかし、わたしの右と左に座ることは、わたしが決めることではなく、それが備えられている人たちのためのものです。わ

たしは言ったではありませんか。後の者が先になる、と。」 ほかの十人はこのやり取りと二人の弟子の要求を聞いて、彼らに腹を立てました。

王国におけるまことの偉大さ

そこでイエスは皆を呼び寄せて、大切なことを教えられました。「あなたがたもよく知っているように、諸国の民を治める者たちは、いつも民を抑えつけています。権力者たちは、自分の利益のために、また自分の権力の座を保つために、その力を濫用するのが習いです。あなたがたのあいだ、弟子たちの家族の中では、決してそうであってはなりません。あなたがたのあいだで偉くなりたいと思う者は、皆に仕える者にならなければなりません。あなたがたのあいだで先頭に立ちたいと思う者は、皆の奴隷になりなさい。」 神の基準は、実に逆さまなのです。それは、仕えられるためではなく来られた人の子によって明らかにされます。**この方は、仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来られたのです。この方のいのちは、多くの人を罪と死の捕らわれから贖い出し、買い戻すために、「引き換え」にされるのです。**

盲人バルテマイが癒やされる

イエスと弟子たちは、エリコに着きました。町では、大勢の群衆がイエスと弟子たちの周りに集まっていました。彼らがエルサレムに向けて再び町を出ると、群衆もこの方について行きました。そこには、過越の祭りのためにエルサレムへ向かう巡礼者たちからの施しを当てにして、一人の盲目の物乞いが座っていました。テマイの子で、名をバルテマイといいました。彼は、ナザレ人イエスがそこにおられると聞きました。すると彼はすぐに叫び始めました。「**ダビデの子のイエス様、私をあわれんでください！**」 彼はこれまでに何度も、イエスのこと、この方がなさったことを聞いていました。この瞬間を、彼は待ち望んでいたのです。そして今、その瞬間が来たのです。けれども人々は、彼を助けませんでした。彼をイエスのところに連れて行きませんでした。もっとひどいことに、黙れと彼を脅したのです。けれども彼は、ますます叫びました。**救い主、世界の救い主であるこの方は、彼の声を聞かれました。** イエスは立ち止まって言われました。「あの人を呼んで来なさ

い！」 すぐに人々は盲人を呼んで言います。「よかったな。さあ、立て。あの方がお呼びだ。あの方がおまえに会いたいとおっしゃっている！」 彼は上着を脱ぎ捨て、躍り上がって、この方のところに駆け寄りました。イエスは彼に言われました。「何をしてほしいのですか。」 盲人はこの方に言いました。「私の主、私の先生、目が見えるようになることです！」 「安心しなさい」とイエスは言われました。「あなたがわたしにそれほど信頼したので、あなたの信仰があなたを癒やしたのです。」 すると、すぐに彼ははっきりと見えるようになりました。それから彼は、イエスのそばにいたいと願いました。自分の救い主のそばに。イエスがエルサレムへと上って行かれるとき、彼はこの方について行きました。イエスに従うすべての人、すべての弟子たちは、イエスが苦しみを受け、そこで多くの人のための贖いの代価として自分のいのちを与えるためにエルサレムへ行かなければならなかったことに、目を開かれなければなりません。**悪魔と罪と自己中心の奴隷状態から多くの人を買い戻し、贖い出すための代価として、ご自分のいのちを与えるために！** ヨハネとヤコブは、苦しみと死については盲目で、力のことしか考えていませんでした。イエスがバルテマイと同じように、何をしてほしいのかと彼らに尋ねられたとき、彼らは王座を求めました。バルテマイはちりの中に座って、救いを求めていました。

これらの出来事の中で、何があなたに語りかけ、何があなたの心に触れるでしょうか。

あなたにとって新しいことは何でしょうか。

何かを学びましたか。もしかすると、自分の生活の中で実行したいと思うことも学んだでしょうか。

あなたは何のために祈りますか。ここでイエスについて読んだことを通して、イエスを礼拝してください！

疑問がありますか。それとも何か理解できなかったことがありますか。書き留めてください！

11章

イエスはろばに乗ってエルサレムに入り、王として迎えられる

イエスが弟子たちと一緒に、オリーブ山のふもとのベテパゲとベタニアに近づいたとき、この方は二人の弟子にある務めを与えて、先に遣わされました。彼らは次の村で、まだだれも乗ったことのない子ろばを見つけることになっていました。「それをほどいて、私たちのところに引いて来なさい。もしだれかが『何のつもりだ。何をしているのか』と尋ねたら、こう言いなさい。『主がお入り用なのです。すぐにまたここにお返しします。』」 二人は、戸口の外につながれている子ろばを見つけました。彼らはそれをほどきました。そばに立っていた人たちは、思ったとおり言いました。「何をしているのか。」 彼らは、イエスが言われたとおりに答えました。すると人々は許してくれました。

それから彼らは子ろばをイエスのところに引いて来て、自分たちの上着をその上に掛け、イエスはそれに乗られました。それからイエスは子ろばに乗って、大いなる王の都へと進んで行かれました。平和の王であるこの方が、預言者ゼカリヤがゼカリヤ書9章9節で預言したとおりに、へりくだってろばに乗って来られたのです。弟子たちは、この方がキリストであることをほのめかしていました。そう思わせることがたくさんあったので、人々はこの方にふさわしい歓迎をしました。彼らは、王への敬意のしるしとして、自分たちの上着をこの方の前の道に敷きました。じゅうたんのように。ほかの人たちは青い枝を切って、道に敷きました。多くの人々が、その中にはイエスと一緒にガリラヤから来た大勢の巡礼者たちもいましたが、この方の前を進み、後に従う人たちは大声で叫びました。「ホサナ――神がほめたたえられますように！ 神の使命を帯びて来られる方に、祝福がありますように！ ついにダビデの王国が来た！ 天におられる神がほめたたえられますように！」 詩篇118篇26節が言っているとおりです。けれどもイエスは黙っておられました。この方が何度もはっきりさせてこられたように、この方の使命は、イス

ラエルを軍事的、政治的に解放しようとする王になることではなかったからです。十字架が、この方の生涯とその王国を支配していました。そして、この方に従うことになる人たちをも。わずか一週間のうちに、この方はご自分の十字架を負って、町の外のゴルゴタへと運んで行かれることになるのです。私たちがイエスに歓声を上げるのなら、私たちに栄誉をもたらした方としてではなく、私たちの罪のために死ぬために来られた方として、歓声を上げるのです。私たちはまず、ダビデの国を建てる方としてではなく、神の国のためにご自分のいのちをささげる方として、この方を迎えなければなりません。

町の中では、歓声はすぐに静まります。イエスはまっすぐ宮に入り、そこを見て回られました。夕方になると、この方は、過越の祭りに来た多くのほかの巡礼者たちと同じように、周りの村々で夜を過ごすために町を出られました。この方は弟子たちと一緒にベタニアに戻られました。

古いイスラエルとその宮――実のないいちじくの木

翌朝、彼らが再びエルサレムへ向かっていたとき、イエスは空腹を覚えられました。遠くから、春にはよくあるように、青々とした葉の茂ったいちじくの木が見えました。この方は、早なりのいちじくがないかと近寄って行かれました。けれども、葉のほかには何も見つかりませんでした。まだ遅なりのいちじくの季節ではありませんでした。そのとき弟子たちは、この方がその木に向かってこう言われるのを聞きました。「今後いつまでも、だれもおまえの実を食べることがないように！」

ほかのときに、イエスがこのような言葉を口にされたことは一度もありません。この方の言葉には、祝福し、癒やし、教える力があります。けれども、さばく力もあるのです。この方が宮を訪れ、そこで教え、行おうとしておられたことは、いちじくの木に対するこのしるしの行為に対応しています。イスラエルと、そのアイデンティティのよりどころである壮大な宮の中心は、まもなく終わりを迎え、新しいものに場所を譲ることになるのです。

イエスは商人たちを宮から追い出される

エルサレムに着くと、この方はまっすぐ宮に入られました。そこでこの方は、ご自分のすぐ周りで、売り買いしている人たちを追い出し始められました。両替人や鳩を売る者たちの台を、この方はひっくり返されました。この方は、だれかが宮を通って物を運ぶことをお許しになりませんでした。

それからこの方は、それを見ていた人たち皆に教えられました。「聖書は、イザヤ書56章7節で、『わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる』と言っているではありませんか。それなのに、あなたがたはそれを、諸国の民を招くのではなく締め出す場所にしてしまいました。この家を、あなたがたは自分たちの家にしてしまったのです。自分たちを祝うために。あなたがたは、神の家を強盗の巣にしてしまったのです。」

宮は強盗の巣に成り下がっていました。世俗化し、宮を自分たちの隠れ家、自分たちの支配領域だと宣言した強盗たちによって運営され、組織されていたのです。そこでは彼らの規則がまかり通っていました。エレミヤがすでにエレミヤ書7章11節で言っていたとおりです。偽り、盗み、殺し、姦淫、偽りの誓い――それが、宮に責任を負う者たちの悲しい姿なのです。こうして宮は、その使命を永久に失ってしまいました。

イエスは、ご自分の行動によって、いけにえの務めを少しのあいだ中断させられました。それによってこの方は、宮へのさばきと、いけにえの務めの終わりを、象徴的に示されたのです。**この方の行動が示しているのは、回復ではなく、終わりなのです。** 宮も、いちじくの木と同じ目に遭うことになっていました。宮は、もはやあるべき姿ではありませんでした。その時代は終わろうとしていました。宮は、あらゆる民の人々が属することになる、新しい霊の宮に道を譲ることになるのです。祭司長たちと律法学者たちは、それを聞きました。彼らは激怒し、この方を殺そうと決めました。イエスは、たった一つの言葉で彼らの正体をさらけ出されたのです。彼らこそ、宮を自分たちの隠れ家にしていた強盗でした。彼らは、イエスが民に及ぼしている影響力を恐れていました。それは日ごとに増していました。人々がこの方の教え

に深く感銘を受けていたからです。イエスの宮での行動が、最終的にイエスが裁判にかけられるきっかけとなります。死という結末を伴って。

いちじくの木が枯れた――大切なのは、祈り、信じ、赦すこと――宮の建物ではない

翌朝、町へ向かう途中で、彼らは再びあのいちじくの木のそばを通りました。木はすっかり枯れていました。ペテロはその木を見て思い出し、イエスに言いました。「先生、ご覧ください。あなたがのろわれたいちじくの木が枯れています。」 イエスは彼に答えられました。「大切なのは信仰です！ 神に信頼しなさい！ 一つ確かなことがあります。だれでも、心の中で疑わずに信じるなら、この山に向かって『海に投げ込まれよ』と言えば、そのとおりになります。本当にそうなのです。あなたがたが祈り求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。また、一緒に立って祈るときには、だれかに対して恨んでいることがあるなら、まずその人を赦しなさい。そうすれば、天におられるあなたがたの父も、あなたがたの過ちを赦してくださることができます。そして、あなたがたの祈りに答えてくださるのです。」

イエスが語られた山とは、宮のあるシオンの山でした。神がもはや住んでおられない所です。本物の信仰と赦す備えは、もはや民族のアイデンティティのためにしか役立たない建物よりも大切なのです。**祈りと信仰と赦しが、イエスの新しい共同体の特徴です。この共同体こそが、本物の祈りの家、すべての民から集められたイエスに従うすべての人から成る、新しい霊の宮となるはずでした。**

宮で商人たちを追い出したイエスの権威についての律法学者たちの問い

三日目、イエスは弟子たちと一緒にエルサレムに来られます。この方が宮の中を歩いておられると、あまり友好的とは言えない男たちがイエスのところにやって来ます。祭司長たち、律法学者たち、長老たちでした。彼らはこの方に言います。「昨日あなたがしたことを、ここ宮の中でするための権威と資格を、だれがあなたに与えたのですか。」 イエスは答えられました。「わ

たしも、あなたがたに一つ尋ねましょう。わたしに答えなさい。そうすれば、わたしが何の権威によってこれらのことをしているのか、あなたがたに話しましょう。わたしの問いはこうです。ヨハネのバプテスマは神からのものでしたか、それとも人からのものでしたか。あなたがたはどう言いますか。」 そこで彼らは額を寄せ合い、何と答えるべきかを考えました。大勢の人々が彼らの周りに立っていました。彼らは考えました。もし「神から」と言えば、なぜ信じなかったのかということになる。もし「人から」と言えば、群衆を恐れなければならない。群衆は、ヨハネが神から遣わされた預言者だと確信していたのです。結局、彼らは小さな声で、作戦上の理由から言いました。「私たちにはわかりません。」 するとイエスは彼らに言われました。「それなら、わたしも、何の権威によってこれらのことをしているのか、あなたがたに話しません。」 こうして、十字架刑の前の最後の週の三日目に、公然とした対決は起こらずに済みました。メシアの知恵が、この方を殺そうとする者たちを、まだ押しとどめていたのです。それでも、緊張ははっきりと感じられました。

これらの出来事の中で、何があなたに語りかけ、何があなたの心に触れるでしょうか。

あなたにとって新しいことは何でしょうか。

自分の生活の中で実行できることを、何か学びましたか。

あなたは何のために祈りますか。ここでイエスについて読んだことを通して、イエスを礼拝してください！

この箇所について疑問がありますか。何か理解できなかったことがありますか。書き留めてください！

12章

貸し出されたぶどう園と悪い農夫たちのたとえ――ぶどう園であるイスラエルと、その責任ある指導者たち、暴力的なぶどう農夫たち。イエスの権威についての問いへの間接的な答え――この方は愛する子であり、要の石である

それからイエスは、エルサレムの人々、町の住民たちと国中から来た大勢の巡礼者たちに、たとえで語り始められました。「ある人がぶどう園を造り、垣を巡らし、ぶどうの搾り場を掘り、ぶどう園の中に見張りのやぐらを建てました。彼はそれを農夫たちに貸して、外国へ旅に出ました。しばらくして、持ち主は、正当な取り分の**収穫**を受け取るために、しもべを遣わしました。」 神は、ご自分の民のうちに、従順と礼拝という本物の実を求めておられたのです。「ところが、農夫たちは彼を袋だたきにして、何も持たせずに送り返しました。そこで、持ち主はまた別のしもべを遣わしました。ところが、農夫たちはその頭を傷つけ、ひどく罵りました。次のしもべは殺してしまいました。それでもぶどう園の持ち主は、自分の取り分を受け取るために、何度も人を遣わしました。彼は並外れた寛容を示したのです。それでも、農夫たちは、ある者を殺し、ある者を打ちたたきました。」 何百年にもわたる、不吉な、反抗的な伝統です。

「そこで持ち主は考えました。『今、ほかに何ができるだろう。**わたしのただ一人の愛する息子**を遣わそう。せめて息子なら敬ってくれるだろう。』 ところが、何もかも自分たちのものであるかのようにふるまっていたぶどう園の農夫たちは、こう話し合いました。『あれは跡取りだ。さあ、あいつも殺してしまおう。そうすれば、ぶどう園は完全に俺たちのものだ。』」 それは大きな思い違いです。ぶどう園は、いつまでも持ち主のものなのです。「そして息子が来ると、彼らは捕らえて殺してしまいました。それから、ぶどう園の外に放り出しました。」

それからイエスは尋ねられました。「ぶどう園の持ち主であり主人である人は、どうするでしょうか。彼はやって来て農夫たちを殺させ、ぶどう園をほかの人たちに与えるでしょう。これはみな、あなたがたにとって聞き覚えのない話でしょうか。聖書の詩篇118篇22節で、あなたがたは読んだことがないのですか。『家を建てる者たち、つまり民の霊的な指導者たちが、見向きもせずにわきへ捨てた石、それが要の石、宮の建物全体にとって最も大切な礎石となった。これは主がなさったことだ。私たちの目には不思議なことだ！』」 神はご自分の御子を義と認められました。神はこの方を、神であるメシアとして確証されたのです。この方がこう言われると、彼らはますます、この方を捕らえて殺そうと決意しました。けれども、自分たちが指導者であるはずの群衆を恐れて、手出しができませんでした。彼らは、このたとえが自分たちのことを指していると、はっきり理解していました。彼らこそ、過去に持ち主から遣わされた者たちを、何度も追い返し、打ちたたき、殺してきた農夫たちだったのです。彼らは民の指導者として、実のないことに責任がありました。このたとえは、民の上に立つ者たちにとっても、弟子たちにとっても、説明を必要としませんでした。今このたとえによって、なおも神の寛容を示されているのに、彼らの心はもう一度かたくなになり、紀元70年に現実となったさばきを自ら招くのです。そして彼らは、もう一度この方をそのままにして、また引き下がりました。

火種を含んだ罠の問い――皇帝に税金を納めるべきか

それから、上に立つ者たちは、またしても悪だくみと悪意をもって、パリサイ人とヘロデ党の者を何人かイエスのところに遣わします。このような意図でもなければ、この二つのグループが手を組むことはありえませんでした。彼らは、この方に罠を仕掛けようともくろみます。皮肉たっぷりにほめそやして、彼らはこの方に言います。「先生、私たちは、あなたが誠実で公平な方であり、だれにもおもねらない方であることを知っています。あなたは人からの評判を気にされません。ただ神が私たちに望んでおられることを教えておられます。教えてください。私たちユダヤ人、神の民が、ローマ皇帝に税金を納めるのは正しいことでしょうか。納めるべきでしょうか、納めるべ

きでないでしょうか。」 過越の祭りの時期に宮の広場で出されたこの問いは、ユダヤ人たちがローマ人からの自由と解放を渇望していた、熱く爆発寸前の雰囲気の中に投げ込まれたのです。メシアとして迎えられたこの方は、それについて何と言うでしょうか。税金を納めることに賛成すれば、ユダヤ人のアイデンティティを売り渡す臆病な協力者として、この方の正体を暴くことができます。税金を納めることを拒めば、ローマに対する政治的な反乱として告発することができます。どちらの答えも、それだけでこの方を訴えるか、表舞台から消し去るのに十分でした。けれどもイエスは、彼らの偽善を見抜かれました。「なぜ、こんな罠の問いをするのですか。デナリ銀貨を持って来て、わたしに見せなさい。」 この方ご自身は、一枚も持っておられませんでした。だれもが持っているわけではなかったのです。質問した者たちは持っていました。彼らはきちょうめんに税金を納めていたのです。彼らはこの方にデナリ銀貨を渡しました。この方は彼らに尋ねます。「これはだれの肖像ですか。」 彼らは言います。「皇帝の肖像です。アウグストゥス（Augustus）の子、ティベリウス（Tiberius）です。」 するとイエスは彼らに言われました。「**それなら、皇帝のものは皇帝に返しなさい。そして神にふさわしいものは神に返しなさい。**」 彼らはこの上なく驚きました。この方は、またしても彼らを黙らせてしまったのです。見事なやり方で、イエスは、皇帝の領域、つまり税金と政治を、神の国と区別されます。イスラエルの神の前では、ローマ皇帝にはほとんど何の意味もありません。イエスは神をすべての上に置かれます。神にこそ、いつも完全な、第一の従順がささげられるのです。神と並ぶ絶対的な価値などありません。**ローマに対する暴力的な反乱ではなく、神への従順こそが、神の国を正しく待ち望むことなのです。** 税金を納めることは、それと矛盾しません。そして、皇帝のものを皇帝に返すことは、まったく受け身の、非暴力の反乱でもあるのです。それをもって売り買いをもう続けない、という意味で返すのです。からだといのちをもって神に従うことが、第一の最も大切な務めであり続けます。だれも、この方に手出しはできませんでした。

復活についての罠の問い

復活はないと主張しているサドカイ人たちも、この方のところに来ました。彼らはこの方に尋ねました。「先生、モーセは書きました。もしある人の兄弟が、子どものない妻を残して死んだなら、その人は死んだ兄弟の妻と結婚し、兄弟のために子孫を残さなければならない、と。たとえば、**七人の兄弟**がいたとしましょう。長男は結婚しましたが、妻とのあいだに子が生まれる前に死にました。それで、すぐ下の弟がその妻と結婚しました。けれども彼も、子が生まれる前に死にました。三男も同じでした。七人の兄弟は、だれも子孫を残しませんでした。最後に、七人の兄弟みなの後で、その妻も死にました。**復活**の時、**彼女はそのうちのだれの妻になるのでしょうか**。彼女は七人の兄弟みなの妻だったのですから。」 イエスは彼らに言われました。「あなたがたが思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからではありませんか。死人の中からよみがえるときには、人はもはやめとることも嫁ぐこともありません。天の御使いたちのようになるのです。神の新しい世界では、もはや人間を生み、増やすことはありません。死人がよみがえることについては、モーセの書の柴の箇所で、神がモーセに『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』と語られたことを、読んだことがないのですか。**神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神です**。あなたがたは大変な思い違いをしています。」 アブラハム、イサク、ヤコブは今すでに、来世の天の世界で生きています。そしてイエスが再び来られるとき、彼らはよみがえるのです。死が最後の言葉なのではなく、神から来るいのちこそが最後の言葉なのです。律法学者の一人が彼らのところに来ました。彼は、彼らが議論しているのと、イエスがみごとに答えられたのを聞いていました。そこで彼はイエスに尋ねました。「すべての戒めの中で、どれが第一でしょうか。」

第一の戒めについての問い

すべての戒めの中で、どれが第一でしょうか。イエスは答えられました。「第一の戒めはこれです。**『聞け、イスラエルよ。主は私たちの神、主は唯一である。あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くし、力を尽く**

して、あなたの神である主を愛しなさい。』第二はこれです。『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。』

この二つよりも大きな戒めは、ほかにありません。」 律法学者はこの方に言いました。「良いお答えです、先生。あなたは真実を語られました。主は唯一であって、主のほかに神はいない、と。そして、心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして主を愛し、また隣人を自分自身のように愛することは、どんな全焼のささげ物やいけにえよりもまさっています。」 イエスは、彼が賢く答えたのを見て、彼に言われました。「あなたは神の国から遠くありません。」 それから後は、もはやだれも、あえてこの方に問いかける者はいませんでした。

キリストについての問い

イエスは宮で教えておられたとき、こう言われました。「どうして律法学者たちは、油注がれた方をダビデの子だと言うのですか。ダビデ自身が、聖霊に導かれて言いました。『主は、私の主に言われた。あなたは、わたしの右の座に着いていなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足の下に置くまで。』 ダビデがこの方を主と呼んでいるのに、どうしてこの方がダビデの子なのでしょうか。」 大勢の群衆は、固唾をのんでこの方の言葉に聞き入っていました。イエスがメシアであるのは、ダビデの子だからというだけではありません。この方は、同時にそれ以上の方なのです。この方は、神の子であり、ダビデより前におられた人の子であるので、ダビデの主なのです。ダビデは先を見通して、詩篇110篇でイエスをあがめています。律法学者たちは、そのことを見失っていたか、あるいは一度もそのように見たことがなかったのです。

律法学者たちへの警告

教えの中で、この方は忠告されました。「律法学者たちに気をつけなさい。彼らは立派な長い衣を着て歩き回り、広場であいさつされることを好みます。彼らは会堂の上席や、宴会の上座を欲しがります。やもめたちの家を食い物にし、見栄のために長々と祈る者たちは、より厳しいさばきを受けるの

です。」 彼らは聖書を知っていたのですから、弁解の余地はないでしょう。虚栄と地位の象徴と長い祈りが、敬虔な人をつくるのではありません。イエスは、律法学者たちのグループを厳しく批判されます。ほかのだれよりも厳しく批判されるのは、彼らが聖書を、したがって神のみこころを知っていると誇っていたからです。神のことばと、うわべだけの敬虔や偽善とは、何の関わりもないのです。

貧しいやもめのささげ物

イエスは献金箱の向かいに座り、人々がささげ物を投げ入れる様子を見ておられました。大勢の金持ちが、たくさん投げ入れていました。そこへ一人の貧しいやもめがやって来て、レプタ銅貨二枚を投げ入れました。それは一コドラントに当たります。イエスは弟子たちを呼び寄せて言われました。「まことに、一つのことをあなたがたに言います。この貧しいやもめは、献金箱に投げ入れていた人たちの中で、だれよりも多くを投げ入れました。**皆はあり余る中から一部を投げ入れたのに、この人は乏しい中から、持っていたすべてを、生活費のすべてを投げ入れたのです。**」 これは、イエスの教えの頂点の一つです。人の前ではなく、神の前で尊敬を集めること。神に自分をささげること、それこそが、イエスがこの貧しいやもめのうちに見いだし、ほめたたえておられることなのです。

これらの出来事の中で、何があなたに語りかけ、何があなたの心に触れるでしょうか。

あなたにとって新しいことは何でしょうか。

自分の生活の中で実行したいと思うことを、何か学びましたか。

イエスのどんなところに心が躍りますか。

あなたは何のために祈りますか。ここでイエスについて読んだことを通して、イエスを礼拝してください！ この方に、あなたの感嘆の思いを言い表してください！

疑問がありますか。書き留めてください！

13章

終わりの時についての説教――宮の崩壊

イエスが宮の建物から出て行かれるとき、弟子の一人がこの方に言いました。「先生、巨大な石でできた、なんとすばらしい建物でしょう！」 イエスは彼に答えられ、皆がそれを聞きました。「これらの宮の建物が見えますか。ここで、どの石も崩されずに積まれたまま残ることは決してありません。何もかも、土台まで破壊されます。」 それから一行は、キデロンの谷を越えて、向かいにある、より高いオリーブ山へ行きました。そこからは、宮の建物群を見渡す壮観な眺めがありました。そこへ、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレの四人の弟子たちが、自分たちだけでイエスのところに来て尋ねました。「宮が破壊されるのは、いつのことですか。また、これらすべてのことが起ころうとするときのしるしは何ですか。」

終わりの時の産みの苦しみの始まり

イエスは、彼らも私たちも望んだであろうのとは違う仕方で、彼らに答えられました。「だれにも惑わされたり、迷わされたりしないように気をつけなさい。多くの者が現れて、自分こそキリストだと主張するからです。そして、多くの人が惑わされます。多くの人が、軽々しく彼らを信頼するでしょう。しかし、わたしが再び来るときは、そうではありません。あちこちで戦争のことを聞いても、うろたえてはいけません。そうなるのは必然です。そして終わりまで、そうであり続けます。あなたがたがそれらすべてのことを聞き、体験しても、それはまだ終わりではありません。和解のない世界で、民族は民族に敵対して戦い、国は国を攻めます。地震や飢饉が起こります。しかし、それはまだ終わりの始まりにすぎません。それらは産みの苦しみ、新しい世界の陣痛の始まりなのです。」 紀元70年のティトゥス（Titus）による宮の破壊とともに、苦難の連鎖反応が始まり、それは終わりの日にイエスが目に見える形で現れるときまで続くのです。

終わりまで、いたる所での迫害と苦難

「自分自身に気をつけなさい！ ただ周りを見たり聞いたりするのではなく、自分自身を見なさい！ わたしの弟子であるあなたがたを、人々は法廷に引き渡します。あなたがたは、わたしの証人であるゆえに、むちで打たれ、たたかれます。わたしのために、あなたがたは支配者や王たちの前に立つことになります。彼らに対する証しのためであり、彼らがわたしの名を聞くためです。彼らだけでなく、全地のすべての民に、わたしが再び来る前に、良い知らせが宣べ伝えられなければなりません。法廷に連れて行かれるとき、どう答え、どう弁明しようかと、前もって心配してはいけません。その時に神から与えられることを話しなさい。話すのはあなたがたではなく、聖霊だからです。全地で、わたしの証人と弟子たちにとって困難な時が来ます。人は自分の兄弟を裏切り、こうして死に渡します。父は自分の子どもたちを。子どもたちは両親を裏切り、死に渡します。彼らがそうするのは、それによって得をするため、あるいは自分が損害を被らないためです。**わたしの友であるあなたがたは、わたしの名のために、すべての人から憎まれます。耐え忍びなさい！ 終わりまで。わたしが再び来るまで。最後まで耐え忍ぶ人は救われます。**」

弟子たちの生きているうちにエルサレムを襲う苦難

「荒らす忌まわしいものが、立ってはならない所に立っているのを見たら――読者はよく注意せよ！――、そのときユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。屋上のテラスにいる人は、家から何かを取り出そうとしてはいけません。畑にいる人は、上着を取りに戻ってはいけません。身重の女たちと乳飲み子を持つ女たちにとって、それは特にひどいことになります。それが冬に起こらないように祈りなさい！ その時は最悪の時、それまでのどんな時よりも、またその後のどんな時よりもひどい時になるからです。もし主がその時を縮めてくださらなかったら、だれも救われないでしょう。しかし、ご自分が選んだ人たちのために、主はその時を短くしてくださったのです。そのとき、だれかがあなたがたに『ほら、ここにキリストがいる』とか、『ほら、あそこにいる』とか言っても――信じてはいけません。偽キリストたちや偽

預言者たちが現れて、しるしや不思議を行い、選ばれた人たちを惑わそうとするからです。**だから、気をつけていなさい。わたしは何もかも前もって話したのですから。**」

人の子イエス・キリストの現れ

「全世界の苦難の日々の後で、突然その時が来ます。わたしは再び来ます。すべての人に見える形で。宇宙と政治の激しい揺れによって導かれ、まぎれもなく告げ知らされて。太陽は暗くなり、月は光を放たなくなります。星は天から落ちます。そうです、天のもろもろの力が揺り動かされます。」 これまで一度も起こったことのないこれらのしるしは、栄光のうちにメシアがすぐに来られることを告げ知らせるのです。

「そのとき人々は、人の子が天に、雲のうちに来るのを見ます。大いなる力と権威と、栄光に満ちた光の輝きを帯びて。」 この方の現れは、すべてのものを止めてしまいます。この方の弟子たちには言い尽くせない喜びが、ほかのすべての人には驚愕と驚きと動揺がもたらされます。「人の子は御使いたちを四方に遣わし、ご自分が選んだ民、ご自分の弟子たちを、地の果てから集めます。」 この方は彼らを、あらゆる苦難から救い出されます。イエスの時代とそれ以前に、イスラエルが宮の周りに集まったように、そのとき、新しい創造の始まりに、全世界の神の民が、低くされ、そして高く上げられた神の御子の周りに集まるのです。

いちじくの木

「いちじくの木から学びなさい。枝が柔らかくなって葉が出てくると、夏が近いことがわかります。同じように、これらのことが起こるのを見たら、もう長くはかからないと悟りなさい。まことに、あなたがたに言います。この時代、この神を恐れない人間の種類は、終わりまで、わたしが再び来るときまで存続します。わたしが語ったことがすべて成就するまで。」 選ばれた人たちと並んで彼らは存続し、選ばれた人たちを苦しめ、迫害します。けれども最後には、彼らは過ぎ去り、最終的にさばかれるのです。

「天も地も過ぎ去ります。しかし、わたしのことばは永遠に有効です。」 何が起ころうと、イエスと弟子たちに敵対する者たちの敵意がどれほど脅威的であろうと、イエスは再び来られ、ご自分の約束を実現されるのです。

「その時がいつなのかは、天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。

「**いつも備えていなさい！――その時がいつ来るのか、あなたがたは知らないのですから**。」

旅に出る人

「それは、旅に出るために家を離れる前に、しもべたち一人ひとりにそれぞれの仕事を割り当て、門番には目を覚ましているように命じる人のようです。ですから、目を覚ましていなさい。家の主人がいつ帰って来るのか――夕方か、夜中か、明け方か――あなたがたは知らないのですから。主人が突然帰って来て、あなたがたが眠っているのを見つけることがないように。わたしがあなたがたに言うことは、すべての人に言うのです。**目を覚ましていなさい**！」

これらの出来事の中で、何があなたに語りかけ、何があなたの心に触れるでしょうか。

あなたにとって新しいことは何でしょうか。

何かを学びましたか。自分の生活の中で行いたいと思うことを。

イエスのどんなところに心が躍りますか。

あなたは何のために祈りますか。ここでイエスについて読んだことを通して、イエスを礼拝してください！ この方に、あなたの感嘆の思いを言い表してください！

疑問がありますか。何かはっきりしないことがありますか。書き留めてください！

14章

祭司長たちの企てと陰謀

二日後には、過越の祭りと種なしパンの祭りが始まろうとしていました。祭司長たちと律法学者たちの決意はあまりにも固く、彼らは、この方を捕らえて殺すための策略を必死に探していました。イエスは、彼らの存在そのものを問いに付したのです。この方は取り除かれなければなりませんでした。けれども、彼らには民も納得するような理由が必要でした。民はこの方を敬っていたからです。祭りの間に起こることのないよう、それはできるだけ早く行われなければなりませんでした。祭りの最中なら、民の暴動が起こるでしょうから。

ベタニアでイエスに油が注がれる

イエスは、ベタニアで、ツァラアトに冒された人シモンの家に客として招かれていました。彼は、イエスに癒やしていただいた人でした。食事の最中に、一人の女が、純粋で高価なナルド油の入った小さな石膏の壺を手にして、思い切って入って来ました。彼女はその壺の首を折り、イエスの頭に油を注ぎました。その場にいた人たち皆にとって、それは奇妙な状況でした。この女は、イエスへの敬愛を比類のない仕方で表したのです。彼女は、この方を殺そうと企てていた者たちとはまったく対照的です。食卓を囲む人々のあいだに、厳かな静けさが訪れました。イエスは、まるでそれを頼んでおいたかのように、すべてをなされるままにしておられました。ところが、弟子たちが憤慨しました。「何のために、こんな無駄遣いをするのか」と、彼らは互いに言いました。「この高価な油なら、300デナリ以上に売れて、その金を貧しい人たちに施すことができたのに。」 300デナリは、労働者のほぼ一年分の賃金に当たりました。そして彼らは、この女を激しく責めました。けれどもイエスは言われました。「そのままにしておきなさい！ なぜこの人を困らせるのですか。この人は、わたしのために良いことをしてくれたのです。貧しい人たちは、いつもあなたがたと一緒にいます。あなたがたは望む

ときにいつでも、彼らに良いことをしてやれます。本当にそうしなさい！ **しかし、わたしは、もう長くはあなたがたと一緒にいません。この人は、自分にできることをしたのです。前もってわたしのからだに油を塗り、埋葬の備えをしてくれたのです。** まことに、あなたがたに言います。世界中どこでも、良い知らせが宣べ伝えられる所では、この人のしたことも語られるでしょう。」 良い知らせを世界中に宣べ伝えることには、イエスとともにあったすべての教えと出来事が含まれるはずでした。イエスが特別な、そして永続する意味を与えておられるこの出来事も、そうです。

だれも気づいていなかったのは、イエスこそ、何も持たない貧しい人だったということです。しかも、暴力的な死を遂げることになる、苦しむ人でした。彼女の良い行いは、イエスに喜ばれ、イエスを喜ばせます。あれほど無意味で無駄に見えたことが、良い行いのど真ん中を射抜いていたのです。実際、時間が足りず、死んだイエスに油を塗ることは不可能になるはずだったからです。彼女はそれを、具体的に先取りしていたのです。そして彼女は、弟子たちとは違って、この方の死を予感し、それを重んじていたのです。

ユダが裏切り者になる

その後、十二人の一人、シカリ派（短剣党）のユダが祭司長たちのところに行き、イエスを彼らに引き渡そうと申し出ました。彼らは大喜びしました。これ以上の好機は考えられませんでした。彼らは、その見返りに金を与えると約束しました。そのときからユダは、イエスを裏切り、その居場所を明かす都合の良い機会をうかがっていました。

過越の食事の準備

種なしパンだけを食べる祭りの週の、最初の日が来ました。過越の小羊がほふられる日です。小羊はエルサレムの城壁の内側で食べなければなりませんでした。

過越の祭りは、イスラエルの民がエジプトから解放されたことを、毎年思い起こさせるものです。指導者であるモーセと、その血が門柱に塗られた過越の小羊によって。こうしてイスラエルは、さばきを免れたのです。この物語

が、イエスの時代に、より高く、同時により深い仕方で繰り返されます。イエスはモーセのように奇跡を行い、ご自身が過越の小羊であって、そのいのちは多くの人のための贖いの代価として与えられるのです。今問題になっているのは、より大きなさばきからの救いです。今こそ、イエスが比喩的に言えば、モーセのように紅海の前に立ち、これ以上ないほど恐ろしいものに立ち向かわれる、その瞬間が来たのです。

そのとき弟子たちはイエスに尋ねました。「過越の食事をどこで用意しましょうか。」 イエスは二人の弟子にこう命じて遣わされました。「町に入りなさい！ そこで、水がめを運んでいる男に出会います。その人について行き、彼がある家に入ったら、その家の主人にこう言いなさい。『私たちの先生が、こう言っておられます。弟子たちと一緒に過越の食事をするために、わたしにどの部屋を使わせてもらえますか。』 すると主人が、敷物が整えられ、すでに祝いの準備ができている、二階の大広間を見せてくれます。そこで、私たちのためにすべてを用意しなさい。」 二人は町に入って行きました。イエスが言われたとおりのものを見つけ、過越の食事を用意しました。このような準備をしなければならなかったのは、暗殺の企てと、身内にいる裏切り者のために、イエスが弟子たちと一緒に人目を避けていなければならなかったからです。

過越の食事――裏切り者もそこにいる

夕方になると、イエスは十二人と一緒にそこに来られました。食事の最中に、この方は言われました。「まことに、あなたがたに言います。あなたがたのうちの一人が、わたしを裏切ります――今わたしと一緒に食事をしている一人が。」 彼らは悲しくなり、次々に「まさか私ではないでしょう」と、この方に尋ねました。イエスは答えられました。「あなたがた十二人のうちの一人、わたしと一緒に同じ鉢にパンを浸している者が、そうするのです。人の子は、自分について書かれているとおりに、確かに死にます。しかし、人の子を裏切るその人はわざわいです！ そういう人は生まれて来なかったほうがよかったのです！」

主の晩餐の制定

今、イエスは、ご自分に従う者たちのために、ご自身による**新しい契約**を祝う、新しい食事を定められます。そして同時に、古い契約の表現である古い過越の食事を、永遠に後にされるのです。食事の最中に、イエスはパンを取り、祝福の祈りをささげてそれを裂き、こう言って彼らに与えられました。「**取りなさい。これはわたしのからだです！**」 それから杯を取り、感謝の祈りをささげて、それも彼らに与えられました。皆がその杯から飲みました。そのとき、この方は彼らに言われました。「**これは、多くの人のために流される、わたしの血です。これは新しい契約の血です。** あなたがたに言います。神の王としての支配が始まった日に、新しく飲むその時まで、わたしはもはやぶどう酒を飲むことはありません。上に立つ者たちと諸国の民によるわたしの死は、わたしの終わりではありません。わたしは生きる！ 神の国は来る！」 それから彼らは、過越の祭りの習わしどおりにハレル詩篇（詩篇115〜118篇）を歌い、オリーブ山へ出て行きました。

イエスは、「より偉大なモーセ」として、十二人の先頭に立って進まれます。この方はイスラエルの先に立って進まれます。いや、全世界の先頭に立って進まれるのです。昔のエジプトのファラオよりも大きな奴隷の主人に立ち向かうために。この方は、かつての紅海のときよりも大きな嵐と恐れの中へと入って行かれます。世界を自由へと導き出すために。**主の晩餐、パン裂きは、イエスが彼らのために苦しみ抜き、戦い取ってくださったことを、一つの食事の中で思い起こすための、比類のない、深い、感覚で受け取る方法なのです。全世界のために。**

十字架の死へとご自分を自発的にささげられたことこそ、まことの、より偉大な過越の小羊なのです。その血は永遠に贖い、罪からきよめ、聖なるものとします。そして永遠の契約を打ち立てるのです。 今日の聖餐は、食事のしるしの中でイエスが絶えず新たにささげられることではありません。パンとぶどう酒はしるしです。それらは比喩的に、記憶を助けるものとして語り、同時に、ご自分の文字どおりのからだをささげたイエスの救いのみわざを告げ知らせるのです。キリストの霊的で目に見えない、けれども同じように現

実的な臨在は、この記念の食事が祝われる所ならどこでも保証されています。けれどもその臨在は、この食事を祝わなくても、この方のもとに集まる人たちのところに、同じようにあるのです。

ペテロはイエスを知らないと言う

「あなたがたは皆、わたしを見捨てます」とイエスは彼らに言われました。「預言者ゼカリヤの書13章7節に、『わたしは羊飼いを打つ。すると羊は散らされる』と書いてあるからです。しかし、わたしはよみがえった後、あなたがたの良い羊飼いとして、あなたがたより先にガリラヤへ行きます。そこで会いましょう。」 するとペテロはこの方に言いました。「たとえ皆があなたを見捨てても――私は決して見捨てません！」 「まことに、あなたに言います」とイエスは答えられました。「あなたは今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしを知らないと言います。」 「いいえ！」とペテロはきっぱりと答えました。「たとえあなたと一緒に死ななければならないとしても！ あなたを知らないなどとは、決して申しません！」 ほかの皆も同じように言い張りました。彼らの自己評価は、まもなく死の危険が迫ると、跡形もなく消えてしまうことになります。マルコは、苦しみの中で揺るがずにいるようにと、ローマの迫害されている教会を励ましています。そして、自分の力と勇気を自分自身の中に求めないようにと、すべての人を励ましているのです。

ゲツセマネ――イエスの、存在をかけた祈りの格闘

彼らは、ゲツセマネと呼ばれるオリーブの林に来ました。その名は「油搾り」という意味です。それはオリーブ山のふもとにありました。イエスは十二人に言われました。「わたしが祈っているあいだ、ここに座っていなさい！」 ペテロとヤコブとヨハネを、この方は一緒に連れて行かれました。この上ない恐れとおののきがこの方を襲い、この方は彼らに言われました。「わたしに迫っていることのために、わたしはとても苦しい。わたしの心は死ぬほどの苦しみの中にあります。ここにいて、わたしと一緒に目を覚ましていなさい！ わたしと一緒に！」 それからこの方は少し先に進んで、地面にひれ伏されました。この方は、もしできることなら、この苦しい時をご自分から過ぎ去らせてくださるようにと、恐れに満ちた声で神に祈られまし

た。「アバ、父よ」とこの方は言われました。「あなたには何でもおできになります！ この杯を飲まなくてもすむようにしてください！ この苦しみの杯を、わたしから取り去ってください。しかし、わたしの望むことではなく、あなたの望まれることがなりますように。」

この苦しみの杯とは、罪人たちの手に落ち、彼らと闇の力に、なすすべもなく引き渡されることを意味していました。多くの人の罪を負うことを。そして最後に、大いなる敵である死に打ち負かされることを。 このへりくだりは、父の救いのみこころに属していました。このさばきの時に入り、それを苦しみ抜くこと以外に、救いはありえなかったのです。この方の残酷な十字架の死によって、すべての人のための救いが戦い取られるはずでした。罪と死と悪魔からの解放です。イエスはそれらに、あらゆる結果を引き受けて身を委ねられるのです。このとき、弟子たちには、これらすべてが隠されています。彼らは、ここで何が起こっているのかを理解していません。私たちでさえ、この信じがたい場面を恐れをもって見つめ、それをいくらかでも正しく受け止め、その深みにおいて理解するための言葉を持ちません。それからこの方は弟子たちのところに戻り、彼らが眠り込んでいるのをご覧になりました。そこでこの方はペテロに言われました。「シモン、眠っているのですか。たった一時間も目を覚ましていられなかったのですか。わたしのためにいのちさえ捨てると言ったではありませんか。」 それからこの方は、彼ら皆に言われました。「来たるべき試練の中で強くあれるように、目を覚まして祈っていなさい。あなたがたのうちの霊は燃えていても、あなたがたの人間としての性質は弱いのです。それに頼ることはできません。」 イエスは再び離れて行き、前と同じ言葉で祈られました。戻って来られると、彼らはまた眠っていました。彼らのまぶたが重くなっていたのです。そして彼らは、この方に何と答えればよいのか、わかりませんでした。イエスは三度目に戻って来ると、彼らに言われました。「まだ眠って休んでいるのですか。もう十分です。時が来ました！ 今、人の子は人々の手に、罪人たちの手に引き渡されます。立ちなさい。さあ、行こう。わたしを裏切る者が、もうそこに来ています。」

御子がご自分のアバにささげた三度の祈りは、聞き届けられませんでした。杯は取り去られませんでした。イエスは従順に、これから起こる出来事にご自分を委ねられます。ここで始まる受難——イエスはゲツセマネで捕らえられます——を、御子はただお一人で耐え抜かれます。ご自分に加えられるすべてのことを、そして闇の力が意味するすべてのことを。けれども、この方の祈りは聞き届けられるのです。ただし、杯が空になったときに初めて。遅くともよみがえりにおいて、この方の切なる叫びは聞き届けられています。イエスは、あらゆる苦しみを永遠に後にされるのです。

イエスが捕らえられる

この方がそう言われるやいなや、十二弟子の一人であるユダが、武装した大勢の群衆を引き連れてやって来ました。彼らは剣や棍棒を持っていて、祭司長たち、律法の教師たち、長老たちから遣わされていました。裏切り者は、彼らと合図を決めておきました。「私があいさつの口づけをする人、それがその人だ。その人を捕まえて、しっかり見張って連れて行け。」 そこでユダはすぐにイエスに近づきました。「先生！」と彼は呼びかけ、この方に口づけしました。すると人々はこの方につかみかかり、捕らえました。臆病な陰険さで、彼らは夜、できるだけ人目につかないようにやって来るのです。ユダの皮肉な愛のしるしは、人間の闇の深淵をのぞかせます。**彼は、贖われていない人類の、失われ、暗くされた心を表しているのです。** イエスのそばにいた者の一人が、剣を抜きました。彼は大祭司のしもべに切りかかり、その耳を切り落としました。暴力を用いず、抵抗もせずに父の杯を受けておられるイエスにとって、それは喜ばしくないことでしかありませんでした。まさにこの非暴力こそが、神がまことにどのような方であるかを現しているのです。比べるもののないへりくだりの中で、イエスは差し伸べられた神の手なのです。さばきのためではなく、救いのために。イエスは男たちに言われました。「わたしは犯罪者なのですか。剣や棍棒を持って、わたしを捕らえに出て来るとは。わたしは毎日、宮であなたがたと一緒にいて、そこで教えていました。そのとき、あなたがたはわたしを捕らえませんでした。しかし、聖書がわたしについて前もって告げていることが成就しなければならないの

です。」 **そのとき、弟子たちは皆、この方を見捨てて逃げてしまいました。** 一人の若者がイエスについて来ていました。彼は亜麻布の上着をからだにまとっていただけでしたが、人々が彼を捕まえようとすると、その上着を捨てて裸で逃げて行きました。ここで著者マルコが自分自身のことを描いているのだ、という推測があります。

ユダヤ人の最高法院の前に立つイエス――有罪の判決

人々はイエスを大祭司のところに連れて行きました。そこには、祭司長たち、議会の長老たち、律法の教師たちが皆集まっていました。ペテロは、遠く離れてイエスについて行きました。以前の近さは、もうありません。彼は屋敷の中庭まで入って行きました。そこで彼は下役たちと一緒に座り、火にあたっていました。祭司長たちと議会全体は、イエスを前もって死刑に定めることができるよう、証言によってこの方に罪を負わせようとしましたが、うまくいきませんでした。確かに、多くの偽証人たちがイエスに不利な証言をしましたが、その証言は一致しませんでした。それから何人かが立ち上がり、こう主張しました。「私たちは、この人が『わたしは人の手で造られたこの宮を壊し、三日のうちに、人の手で造られたのではない別の宮を建てる』と言うのを聞きました。」 けれども、彼らの証言も互いに食い違っていました。そこで大祭司自身が立ち上がりました。民も支持できるような、確かな訴えが見つからないのではないかと恐れたからです。彼は真ん中に進み出て、イエスに尋ねました。「この者たちがおまえに対して申し立てていることに、何も言うことはないのか。」 けれどもイエスは黙っておられ、苦難のしもべとして、一言もお答えになりませんでした。そこで大祭司は、単刀直入にこの方に尋ねました。「**おまえは、約束された救い主キリスト、ほむべき方の子なのか。**」 イエスが公に語られた言葉のいくつかは、もしかするとエルサレムにまで届いていたのでしょう。そうした言葉と、この方がここ数日エルサレムで公に語られたことから、この問いが生まれたのです。そしてそれは、すべてを賭けた問いでした。そして今、爆弾が破裂しようとしていました。「**わたしが、それです」とイエスは言われました。「あなたがたは、人の子が全能者の右の座に着き、天の雲とともに来るのを見ることにな**

ります！」 すると大祭司は自分の衣を引き裂いて言いました。「これ以上、何の証人が必要か。この男が神を冒瀆するのを、あなたがたは自分で聞いた。」 この男は自分を神の栄誉にまで高め、そうして神から栄誉を奪っているのだ。イエスは、メシアであると主張しているだけではなく、御子として神と等しいと主張しておられるのです。「あなたがたの判決はどうか。」 彼らは全員一致で、この方は死に値すると宣言しました。モーセの律法によれば、神への冒瀆には死刑が科せられていました。何人かは、イエスにつばをかけ始めました。彼らはこの方の頭に布をかぶせて何も見えないようにし、それからこぶしで殴りつけて言いました。「だれが殴ったのか。おまえは預言者なのだろう！」 それから、法廷の下役たちがこの方を引き取り、平手で打ちました。上に立つ者たちから手下や便乗する者たちに至るまで、そこにいた者は皆、この方がメシアであるという主張も、神の子であることも信じていません。皆にとって、この方はただの神を冒瀆する者にすぎないのです。けれども、この方が民衆に人気のある人物であるために、彼らには死刑の判決を執行することができず、また許されてもいません。彼らは、やむをえずローマの総督ピラトに頼らなければなりませんでした。

ペテロが自分の主人を知らないと言う

ペテロは、まだ下の中庭にいました。大祭司の召使いの女の一人が通りかかりました。彼女は、火のそばにいるペテロに気づくと、彼をじっと見つめて言いました。「あなたも、あのナザレのイエスと一緒にいましたね！」 ペテロはそれを打ち消しました。「何のことかさっぱりわからない。あなたが何を言っているのか、全然わからない！」 それから彼は外の前庭に出て行きました。その瞬間、鶏が鳴きました。召使いの女はそこでまたペテロを見つけ、周りに立っている人たちに言いました。「この人もあの人たちの仲間です！」 けれども彼は、またそれを打ち消しました。しばらくすると、周りに立っていた人たちが、もう一度言い始めました。「確かに、おまえはあの連中の仲間だ。あのナザレ人の出身地、ガリラヤの人なのだから！ おまえのなまりで、はっきりわかる！」 すると今度は、ペテロは誓いまで立て始めました。「もし私が嘘を言っているなら、神に罰せられてもかまわない！ あなた

がたが話しているその人のことなど、私は知らない。」 その瞬間、鶏が二度目に鳴きました。ペテロは、イエスが自分に言われたことを思い出しました。「鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言い、わたしを知らないと言い張るでしょう。」 すると彼は泣き出しました。自分の忠誠の誓いのすべてが、どれほどあっけなく崩れ去ってしまったかを恥じたのです。彼と同じことが、どのキリスト者にも起こりうるのです！

これらの出来事の中で、何があなたに語りかけ、何があなたの心に触れるでしょうか。

あなたにとって新しいことは何でしょうか。

何かを学びましたか。自分の生活の中で行いたいと思うことを。

イエスのどんなところに心が躍りますか。

あなたは何のために祈りますか。ここでイエスについて読んだことを通して、イエスを礼拝してください！ この方に、あなたの感嘆の思いを言い表してください！

15章

ローマの総督ピラトの前に立つイエス――略式裁判

金曜日の朝早く、祭司長たち、律法学者たち、長老たち、そうです、ユダヤ人の最高法院であるサンヘドリン全体が協議しました。彼らは、イエスをローマの総督ポンティオ・ピラトに引き渡すことに決めました。彼ら自身には、死刑の判決を下すことも、それを執行することもできなかったからです。とはいえ、ピラトが自分たちの判決に従うかどうか、100%確信することはできませんでした。そこで彼らはイエスを縛り、縛ったまま、エッセネ派の地区にある大祭司の家からピラトのところへ連れて行きました。彼らは、ピラトがすぐにこの方に死刑の判決を下すことを期待して、イエスを引き渡しました。ピラトの住まいは、ふだんはカイサリアにありました。けれども祭りの時期には、治安上の理由からエルサレムに滞在していました。兵士たちとともに、彼はおそらくヘロデの宮殿に居を構えていたのでしょう。ピラトは、いきなりイエスに尋ねました。「**おまえはユダヤ人の王なのか**。」「あなたがそう言っています」とイエスは答えられました。イエスのこの肯定の答えは、それが政治情勢にとって危険を意味しうるかどうかを、ピラトに考えさせるきっかけとなります。けれども祭司長たちは、多くのことでこの方を訴えました。ピラトは、イエスが彼らの非難に一つも答えないことを不思議に思いました。そこで彼はこの方に尋ねました。「何も答えないのか。弁明しないのか。見よ、彼らはこんなに多くのことでおまえを訴えているのだぞ！」 けれどもイエスは何もお答えにならず、ピラトはひどく驚きました。イエスは、父に従順な、苦難のしもべの役割に身を委ねておられます。この方の沈黙と受け身の態度は、歴史の主である神ご自身が、ある不思議な計画を進めておられること、そして御子が、最大の反抗と苦しみにもかかわらず、その計画に服しておられることを示しているのです。

バラバが釈放され、イエスが死刑を宣告される

過越の祭りには、ローマ人に捕らえられている囚人を一人釈放する習わしがありました。しかも、ユダヤ人たちが望む者をです。そこに、暴動の中で人を殺したバラバという者がいました。そのとき、イエスを滅ぼそうとしていたユダヤ人の指導者たちに扇動された民衆が、ピラトのところにやって来ました。民衆は、自分たちが選んだ囚人を釈放してもらう権利を主張しました。ピラトは、自分の目には無実であるイエスを釈放する機会だと考えました。そこで彼は尋ねました。「ユダヤ人の王を釈放してほしいのか。」 それは、あざけりの言葉でした。彼は群衆の考えを変えさせようとしたのでしょうか。祭司長たちがねたみからイエスを自分に引き渡したのだということは、彼にははっきりわかっていました。祭司長たちは、殺人者バラバの釈放を要求するよう、民衆をそそのかしていたのです。ピラトはあきらめずに、民衆に言いました。「では、おまえたちがユダヤ人の王と呼んでいるあの者を、私はどうしたらよいのか。」 けれども民衆は、狂ったように叫びました。「**十字架につけろ！**」 ピラトは尋ねました。「彼の罪は何なのか。どんな悪いことをしたというのか。」 すると彼らは、ますます激しく叫びました。「**十字架につけろ！**」 ピラトは、毎年のように民衆の機嫌をとろうとして、殺人者バラバを釈放しました。バラバは、思いがけない幸運をほとんど信じられませんでした。ピラトは、ユダヤ人に対するいくつかの無神経なふるまいのために、ある種の窮地に立たされていました。今ユダヤ人の意向に従わないことは、彼にとってこの上なく都合の悪いことだったでしょう。自分の権力の座を守るために、彼は、ローマの敵であるシカリ派の者、テロリストの代わりに、無実のナザレ人を犠牲にするのです。彼はイエスを彼らの思うままに引き渡し、むちで打たせ、十字架刑を命じました。最終的に十字架刑の責任を負っているのはピラトです。けれども、彼とともに、自分たちのメシアを認めなかった、あるいは認めようとしなかったすべてのユダヤ人も責任を負っているのです。

ローマ兵たちのあざけりと残虐

兵士たちは、イエスを官邸の中庭に連れて行きました。十字架刑のあいだの治安と平穏を保つため、部隊全体が呼び集められました。処刑部隊の兵士たちは手順を心得ていて、それを見世物にしました。彼らはイエスに紫の外套を着せ、茨で編んだ冠をその頭にかぶせました。それから、痛めつけられて血を流しているイエスに、冷笑しながらあいさつしました。「ユダヤ人の王様、万歳！」 彼らは、茨の冠を頭の皮膚に食い込ませようと、葦の棒でこの方の頭をたたきました。彼らはこの方につばをかけ、あざけってその前にひざまずき、拝むふりをしました。この信じがたいほど不当な見世物が終わると、彼らは十字架刑の場所へ向かうために、この方に元の衣を着せました。

十字架刑の場所への道

それから彼らは、有罪を宣告されたナザレのイエスを、十字架につけるために連れ出します。十字架の木は、有罪を宣告された者が自分で運ばなければなりません。けれども、この方はあまりにも弱っていて、兵士たちの目には、その前に死んでしまう危険が高すぎるように見えます。鋭い骨のかけらが仕込まれた革ひものむちによる鞭打ちが、イエスの背中を引き裂き、すでに大量の出血と恐ろしい痛みを引き起こしていたのです。そこで彼らは、たまたま通りかかったクレネ人シモンに、この方の十字架を無理やり背負わせます。アレクサンドロとルフォスの父である彼は、ちょうど畑から帰って来るところでした。

ゴルゴタ――イエスが十字架につけられる

彼らはこの方を、エルサレムの門の外にある処刑場へ連れて行きます。ゴルゴタ、訳すと「どくろの場所」と呼ばれる所です。兵士たちは、痛みを少しでも麻痺させるために、没薬を混ぜたぶどう酒をこの方に飲ませようとしました。けれども、この方はそれをお受けになりませんでした。彼らはこの方を十字架につけました。両手を横木に釘で打ちつけ、十字架を立てます。それは9時から12時のあいだのことでした。処刑人たちは、だれがこの方の衣を取るか、くじを引いて決めました。有罪とされた者の持ち物は、兵士たち

のものだったのです。この方を処刑した罪状が、十字架の上の札に書かれていました。「**ユダヤ人の王、イエス**。」 これはピラトによる罪状で、この方を潜在的な反逆者に仕立て上げるものでした。同時に、ユダヤ人たちに向けた痛烈な皮肉でもありました。上に立つ者たちが阻止したかったにもかかわらず、受け入れざるをえなかった、真実の言葉だったからです。同時に、バラバの仲間である二人の武闘派の自由の闘士が、イエスと一緒に十字架につけられました。一人は左に、もう一人は右に。ローマ人にとって、十字架刑は見せしめのための日常業務でした。この処刑方法は、単に死刑の判決を執行するためのものではありませんでした。目的は破壊と威嚇だったのです。外から見れば、イエスは、ローマの見せしめ戦略の多くの犠牲者の一人でした。イエスの十字架刑は特別なケースではありませんでした。十字架のそばを通りかかる人々は、頭を振ってこの方をののしりました。「おい、おまえは宮を壊して三日で建て直すはずではなかったのか。そんなことができるなら、今すぐ十字架から降りて、自分を救ってみろ。」 ついに目的を果たした祭司長たちや律法学者たちも、同じようにあざけりました。「他人は救い、癒やし、健やかにしたが、自分は救えない。もし彼が約束されたキリスト、イスラエルの王なら、今すぐ十字架から降りてもらおう。そうしたら信じよう！」

もしイエスがこのとき十字架から降りておられたら、そうすることは確かにおできになったでしょうが、この方は偽メシアであることを証明してしまったでしょう。ただ十字架を通ってのみ、本物のメシア、まことのキリストであることが可能だったからです。上に立つ者たちのあざけりと、十字架から降りて来いという彼らの言葉は、イエスにとって大きな誘惑でした。まさに、それがこの方には可能であり、ご自分が権威を持っていることを皆に示すことがおできになったからです。けれども、彼らのためにさえ、またすべての人のために、この方は死ぬまでこの木にとどまられたのです。一緒に十字架につけられた二人の犯罪人も、この方をののしりました。この方が抵抗せず、受け身でおられるので、彼らはののしったのです。それに対して、彼らは悪態をつき、呪いの言葉を吐きます。苦しみも迫害も、神の無力のせいではありません。けれども、まさにこのようにして、ほかの仕方ではなく、

神はご自分の力と栄光を広げられるのです――へりくだりと苦しみと迫害を通して。そこに、神がどのような方であるかが見えてきます。神とは逆に権力を求め、暴力をふるい、弱い者を搾取する人間たちとは違うのです。イエスのへりくだりの中に、神はご自分の心を現されるのです！

イエスが死なれる

昼の12時ごろから午後3時まで、深い闇が全地を、いや、全世界をおおいました。証言されているこの自然現象を、人々はまるで宇宙が崩れ落ちるかのように感じます。日食ではなく、比類のないこと、かつてなかったこと、二度と同じようには起こらないことが起こっていると叫ぶ闇なのです。かつてエジプトで、神のさばきによって初子たちが死んだときの闇のように。ここでは、神の初子が死に、多くの人に代わってさばきを引き受けておられるのです。終末を思わせる雰囲気です。死の苦しみの中にあるイエス、神からも人からも見捨てられ、外に追い出され、蔑まれ、苦しめられ、十字架につけられたイエス。この方は闇の力に向き合われます。この方は世の罪のためのいけにえとなられます。この方こそが、私たちには決して負うことのできない重荷を負われるのです。闇が終わるころ、午後3時ごろ、イエスは大声で叫ばれました。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」 アラム語から訳すと、それは詩篇22篇の冒頭の言葉です。「**わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。**」 何人かの人が、この方の叫ぶのを聞いて言いました。「エリヤを呼んでいる。」 すると一人が走って行って、海綿に酸いぶどう酒を含ませ、それを葦の棒につけて、この方の口もとに差し出そうとしました。そのとき彼は言いました。「エリヤが彼を救いに来るかどうか、見てみよう。」 イエスは大声を上げて、息を引き取られました。その瞬間、宮の中で聖所と至聖所とを隔てていた幕が、上から下まで真っ二つに裂けました。宮の意味と必要性は、神ご自身の手によって、永遠に効力を失わされたのです。何か新しい、よりすぐれたものが、十字架の上で始まったのです！

ローマの百人隊長と、イエスの女弟子たち

十字架刑に責任を負い、十字架の向かいに立っていたローマの百人隊長は、そのかたくなな魂の奥深くで心を動かされました。彼はすでに多くの十字架刑を監督していました。けれども、イエスが敵を呪うこともなく、それどころか彼らを赦しながら死んでいかれるのを見聞きしたとき、彼は言葉を詰まらせながら言いました。「**まことに、この人は神の子であった。**」 この福音書全体の中で、この言葉を口にし、イエスが神の子であると告白するのは、ただ一人、ローマ人なのです。十字架から遠くない所で見ていた女たちも、それを見ていました。彼女たちは、自分たちのラビの身に何が起こるのかを知りたかったのです。ヨハネを除いて逃げてしまった弟子たちとは違って、彼女たちは十字架のそばに立っていました。その中には、マグダラのマリア、小ヤコブとヨセの母マリア、そしてサロメもいました。彼女たちは、ガリラヤでイエスに従い、仕えていました。けれども、イエスについてガリラヤからエルサレムまで来た、この方に従うほかの多くの女たちも、そこにいました。弟子はだれ一人見当たりませんでした――そこにいたのは女たち、イエスのまことの友でした。

十字架は、イエスの友と敵とを分けます。だれもが、自分は十字架のどちら側に立っているのか、という問いの前に立たされます。ローマの百人隊長は、人は側を変えることができ、彼と同じ認識にまで突き抜けることが許されている、ということの証拠なのです。

イエスが墓に納められる

夕方になり、日没とともに安息日が始まろうとしていたとき、アリマタヤのヨセフが勇気を出してピラトのところに入って行き、イエスのからだの下げ渡しを願いました。彼はそれを葬りたかったのです。彼は尊敬されている議員で、神の王国を待ち望んでいました。彼はひそかな弟子であり、少なくともイエスを敬愛する者でした。ピラトは、イエスがもう死んだと聞いて驚きました。十字架につけられた者が死ぬまでに、何日もかかることもあったのです。彼は念のため、十字架のそばにいた百人隊長に問いたださせました。

百人隊長がそれを確認したので、ピラトはイエスのからだをヨセフに下げ渡しました。ヨセフは上等の亜麻布を買いました。彼はこの方を、注意深く十字架から降ろしました。彼はこの方を亜麻布で包みました。彼はこの方を、岩を掘って造った自分の新しい墓に納めました。それから、大きな墓石を洞穴の墓の入り口に転がしました。イエスの二人の女弟子が、ヨセフがこの方をどこに納めたかを、じっと見ていました。マグダラのマリアと、ヨセの母マリアでした。それを見ていながら、もはや何もすることができず、ラビの死を受け入れるほかないのは、悲しいひとときでした。

これらの出来事の中で、何があなたに語りかけ、何があなたの心に触れるでしょうか。

あなたにとって新しいことは何でしょうか。

何かを学びましたか。自分の生活の中で実行できることを。

あなたは何のために祈りますか。ここでイエスについて読んだことを通して、イエスを礼拝してください！

疑問がありますか。書き留めてください！

16章

三人の女たちが、イエスの遺体に油を塗ろうと計画する

土曜日の夕方に安息日が終わり、イエスのからだがアリマタヤのヨセフの新しい墓に納められてすでに一日たったとき、三人の女たちが、イエスに油を塗るために、高価で香りのよい油を買いました。マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、そしてサロメです。彼女たちは、愛する自分たちのメシアに、最後の務めを果たし、敬意を表したかったのです。日曜日の朝ごく早く、週の初めの日、ちょうど日が昇ったころ、彼女たちは墓にやって来ます。彼女たちは、墓の中に入るために、何トンもある墓石をだれが転がしてくれるだろうかと話し合いました。彼女たちは何も特別なことを予想しておらず、ただ悲しい務めを果たしたいと思っていたのです。そして着いてみると、巨大な丸い墓石がすでに転がしてあることに気づき、驚きます。墓の中に入ると、彼女たちはひどく驚きます。白い衣をまとった一人の青年が、遺体が横たわっているはずの頭のほうに座っています。まるで彼女たちを待っていたかのように、この青年は言います。「驚くことはありません！ あなたがたは、十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのですね。あの方はもうここにはおられません。死からよみがえらされたのです。ご覧なさい。ここが、人々があの方を納めた場所です。さあ、この喜びの知らせを、あの方の弟子たちに伝えなさい。特に、あの方を知らないと言ったことで深く落ち込んでいるペテロに。あの方は、死ぬ前に言っておられたとおり、あなたがたより先にガリラヤへ行かれます。そこで、あなたがたはあの方に会い、あの方を見ることになります。」

けれども彼女たちは墓から走り出て、逃げて行きました。震え上がり、気も動転していました。そして、だれにも何ひとつ話す勇気がありませんでした。大きな恐れに捕らえられていたのです。

「イエスのよみがえりは、想像を絶する、圧倒的な神の臨在による恐れを残します。はっきりと感じ取れる神の臨在は、女たちの顔に見て取ることがで

きます。読者は知っておくべきです。この目撃証言は、単なる歴史の話ではなく、**歴史への神のまことの介入**なのだということを。」

よみがえられた方がご自分を現される

週の初めの日の朝早く、イエスは、何よりも先にマグダラのマリアに現れました。彼女から、イエスは七つの悪霊を追い出しておられたのです。彼女はすぐに行って、悲しみに沈み、泣いていた弟子たちに知らせました。この方が生きておられること、そして自分がこの方を見たことをマリアが話しても、彼らは彼女の言うことを一言も信じませんでした。その後、イエスは、田舎道を通って家へ帰る途中の別の二人の弟子に、死ぬ前とは違う姿でご自分を現されました。彼らも、この方に出会うと、すぐに引き返して、ほかの人たちに知らせました。けれども、マリアのときと同じように、彼らの言うことも信じませんでした。それからイエスは、十一人が一緒に食事をしているところに、ご自身で現れました。この方は、ご自分に出会った証人たちを信じなかった彼らの不信仰と、心のかたくなさをお責めになりました。

イエスの派遣の命令

それからイエスは彼らに言われました。「全世界に出て行きなさい！ すべての造られたものに、御国の福音を宣べ伝えなさい！ すべての人が聞くべきです！ すべての人が信じるべきです！ 信じてバプテスマを受ける者は救われます。信じない者は罪に定められます。信じる人たちには、神の力と神の国と福音とを示す、次のような超自然的なしるしが伴います。わたしの名によって、彼らは悪霊を追い出し、人々を解放します。彼らは新しいことばで語ります。彼らは毒蛇をつかみ、振り払います。人々が彼らを殺そうとして毒のあるものを飲ませても、彼らは害を受けません。弱っている人や病人に手を置けば、その人たちは癒やされます。」

天に昇られる

主イエスは、弟子たちに語られた後、彼らの目の前で天に上げられました。**そこで神の右の座に着かれました。** 不死のいのちへとよみがえられたイエスは、その生涯と死の苦しみに報いを受け、天の世界の父のもとへと帰って行

かれるのです。弟子たちは出て行き、いたる所で福音を宣べ伝えました。主は、言われていたとおりにこの宣教に伴い、しるしと奇跡によって彼らのことばを確かなものとされました。

これらの出来事の中で、何があなたに語りかけ、何があなたの心に触れるでしょうか。

あなたにとって新しいことは何でしょうか。

何かを学びましたか。自分の生活の中で実行できることを。

あなたは何のために祈りますか。ここでイエスについて読んだことを通して、イエスを礼拝してください！

結びに

この本を読みながら、神があなたに語りかけておられることを感じていただけたなら、本当にうれしく思います。神がどのように励まし、教え、そしてまた、神から出たものではないために私たちを害するすべてのものについて、警告してくださるかを。

神があなたについて、またあなたに直接語ってくださった、すべての良いことを神に感謝してください。

ご質問があれば、こちらにお書きください：hj-ronsdorf@t-online.de

新約聖書のほかの文書は、www.hans-joerg-ronsdorf.de でご覧いただけます。

さらに、いくつかの大切なヒント

聖書を読んでください。できれば定期的に。

ほかの人たちと一緒に聖書を読んでください――そして、それについて語り合ってください。

神がご自分のことばをあなたにとって生きたものとしてくださるように、祈ってください――まるで神があなたに直接語りかけておられるかのように。

本文を声に出して、続けて二度読んでください。

本文に次の問いを投げかけてください

この本文にどんな見出しをつけますか。本文は神とイエスについて何を語っていますか。本文は人間について何を語っていますか。本文から何を学びますか。私たちは何をすべきでしょうか。みことばは私たちをどのように励ましていますか。

また集まったときには、自分の経験や体験について話し合ってください。

イエス・キリストを愛し、あがめ、聖書を大切にし、読み、真剣に受け止めているキリスト者たちとの接点と交わりを求めてください。